

# 台湾の鎮郷集落型の成立と分布とについて

富 田 芳 郎

(一) 緒 言

(二) 郷村集落の原型

(三) 台湾の漢族による開発

(四) 南部台湾の集村の原型の構造

(五) 集村の拡大と都市化

(六) 北部散村の原型

(七) 桃園台地帯の散村

(八) 集村地域と散村地域との遷移地帯

(九) 台北盆地東部の散村と家屋構造

(一〇) 宜蘭平野の開発と農業集落

(一一) 台北盆地付近の溪谷の集村

(一二) 台湾の南北両部の村落居住相異の要因

(一三) 河港町の原型としての新莊鎮

(一四) 鎮の市街景観の原型の特徴

(一五) 停仔脚

(一六) 鎮郷の居住型と迷信的信仰

(一七) 高山族の居住型

一 緒 言

台湾の鎮、郷はわが国の町村に相当する行政区域の単位で、日領時代は街、庄といった。当時の主な市は後藤新民政長官などの雄大な計画で、台北、台中、台南、基隆各市などで市区改正が行われ、新しく洋風の都市に改造を加えたが、寺廟とか楼門などの旧蹟や、台北では大稻埕や艋舺（万華）の台湾式市街を残し、台南市の如きは漢式色彩が割合強く残っていた。しかし地方都市や村落は漢式のまま残るものが多く好奇の念に駆られた。

筆者は東京高師生当時大正七年山東半島を占領したというので陸軍省に行つて是非巡検させて欲しいと願つたら、将来教師になるのだから実地を見せて置くのも必要だと思つたから引率教授が直接高柳軍務局長に会つて許可を得るようにと注意されたが、予め四国の地学巡検予

定であったので指導教官の佐藤伝蔵教授はなかなか承知されない。仕方がないので校長の補佐役である幹事に訴えたら、指導教官の外国出張旅費に枠があつて予定外の支出は困難という。そこで軍務局に青島下関間は御用船で無料、青島滞在費とか山東鉄道もパスにして一名六十円の予算を立てた。同級生十五名中、王、陳、李の三君は中国留学生で通訳費は不用である。一方地理学の山崎直方先生はB. Willis and Blackwelder の *Research in China* の大冊の参考書を読んで行けなど側面的の応援で辛うじて実現、青島から山東半島一帯、済南から津浦線で泰安に行き曲阜で孔子廟に詣で、済南では師範学校長が東高師出身の先輩でわざわざ泰山麓の千仏山に案内された。そのとき泰山の上から眺めた華北平野の宏大さに感嘆して下山後済南に滞在中、二、三の同級生と連れだつて農村視察に行くと、皆城垣でかこまれた集村でその中に入つて道に迷つていると、一人の中年男に怪まれ、やっと見出した出入口の門扉の門をかけて吾々を捕えようとするのを危く門をすり抜けて畑の道を駆け出したが、こちらはマラソンで鍛えた脚だから暫らく追跡した彼の男もあきらめて戻つたこともあつた。この三週間の旅行で地質と共に中国の地域の広大さと文化の奥深さと幽玄なのに深い感銘を得た。やがて東北大では南京山地の地質研究中であつた早坂助教（後に台北大から島根大学長）の御指導を受け卒業後新設の東北大の法文学部の助手となり、山東半島の地質鉱産の研究報文を出された田中館秀三先生の下で経済地理学の研究中、支那研究会を組織してその世話役もした。その後奈良女高師に五年在勤後、早坂先

生が新設の台北帝大教授に赴任されてから昭和六年台北帝大助教教授に迎えられた。基隆から台北まで車窓からの台湾の地形の尖鋭なことに農村がまだ漢式そのままであるのを見て、初印象からすでに研究を地形と集落とにきめた。ことに農村集落は日本の領土に居て中国の集落の研究ができるであらうことを内心大いに喜んだ。そして爾来十六年間、嶮岨な山々を隈なく跋涉して地形調査をする傍ら絶えず地方の田舎町や農村の調査を行ったが、戦後裸同然で引揚げたので研究資料や成果は研究室や図書館に寄贈して手許になかった。その後台湾大図書館から拙著論文別刷の一部を小包で送られ、近年東北大や山形大の諸教授が台湾に行かれて調査のフィールドノート（もう大部朽ちていたが）を持参され、また台湾大地質学の林朝榮教授や東北大の後輩の馬廷英氏などが台大教授として資料を保存提供され、また引揚げの際原稿の一部を托した東北大の社会学科出身の故陳紹馨教授は「台湾郷鎮地理学的研究」として漢訳して筆者の名で台湾風物雜誌社から発行されたので、それらを資料として本問題を纏めることにした。

茲で先ず問題とするのは、台湾の地勢概図（図一）に示すように台湾の西部は北から南にかけて台地や平野が続いていて、その中間に東方から流れる濁水溪を境としてその南部の農村には集村が多く、それから北部諸平野には散村が多いことが五万分一地形図などでも著しい対照を示していることである。それについて昭和七、八年頃、若干の調査報告を発表したところ、日本の代表的な散村地帯としての富山県の砺波平野の成立について研究された京都大学の小川琢治先生や専門

外の中央氣象台長の岡田武松先生からも御教示と御鞭撻を頂き、ことに岡田先生台北大学視察の機に幣原坦総長の案内で筆者の研究室にも御立寄りになった。そこでもっと組織的な調査を思い立ち、日本學術振興会から研究補助金の交付の申請が受理されたので、先ず台灣總督府の都市計画課に援助を申出たところ、当課としては目下都市改造と台灣南部の門戸としての高雄築港に伴う高雄市の建設計画で仕事は一杯で、街庄の調査まではとても手が廻らないから是非協力をといて予め同課に集められた各街庄当局の計画の基礎となる調査資料と大縮尺の地図類の一切をプリントして筆者に提供された。しかし時すでに日華事變が始まり、この調査が軍機保護法に抵触するおそれもあるので、台灣軍司令部の参謀部に申出て、調査許可証明書(台参防七号、昭、一六)の交付を受けたが、現地調査では各郡の警察課長の了解を得たにも拘わらず、警邏中の警官には随所で屢々訊問を受け、刑事にもよく附き纏われた。派出所で巡査に了解を得ても筆者が家屋の撮影中など息を切らして走って来るので、どうしたというと、実は小学生に怪しいスパイ行為のような人はすぐ届け出るように学校を通じて申渡してあるので、あの人はよいのだというと、子供の警戒心が薄らぐから、密告にはすぐ飛び出すことにしてあるといて、あの家が特に古い型だから写真にとるといったら、二階の出窓に干してある布団が邪魔だろうから撤去させようなどかえって調査に協力して呉れたこともあった。終戦で調査は中絶したが前述のような経緯で「台灣鄉鎮地理学的研究」が民国四十三年(一九五四年)に台北の台灣風物雜誌

社から出版されたのであった。<sup>(二)</sup>

## 二 鄉村集落の原型

村落は村(むら)の「群がる」意と、家棟を指す「落」とから成るが、村落は必ずしも集村型だけでなく、垣根や屋敷林でかこまれた農家が広い農業地帯の平野に散在する散村型もある。勿論その中間型として数戸乃至十数戸が集居しているもの、また道路に沿うて配列する路村とか、河岸の自然堤防の上に列ぶ列村もある。ドイツでも村落居住型の原型についてはドルフ(Dorf)とホーフ(Hof)の差別を立てて論じていることは、古いドイツの地理学者のラッツェルの名著「人類地理学」<sup>(三)</sup>にすでに述べられ、ドルフは居住や経済活動上便利な地区に多数の住宅と仕事場とが集合した部落で、ホーフは一構えの大型の住宅に大家族か又は数世帯の小家族がそれぞれ独立した家計を立て同居して点々と散在するとなし、特に広い地域の一軒屋を特にEinzelhofと呼び、ドルフとホーフの中間型の数軒十数軒の小村をWeilerと呼んでいる。このホーフ型農村はヨーロッパでは古いケルト族の村落に多く、古いサクソン族の住むウェストファリアやオーベルバイエルン地方、フランスではブルターニュ(ケルト族の旧本拠地)に分布し、その他の農村は多くドルフであると述べている。イタリアでは北部のロンバルディア平野に散村型、半島部に集村型が多いことはすでに周知の事実である。

ドイツの集落型には農地の地割型(Einzelhof)と関係もあり、放射

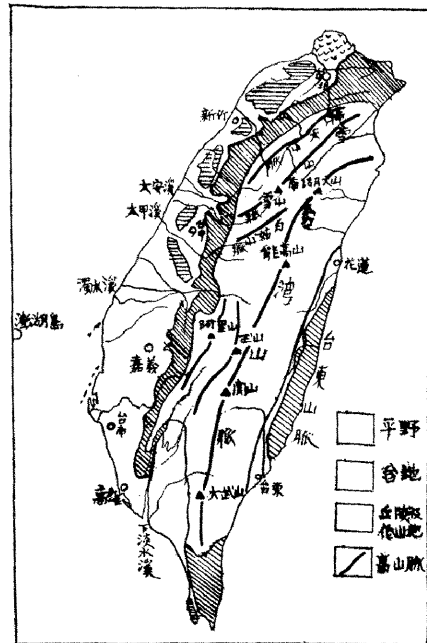
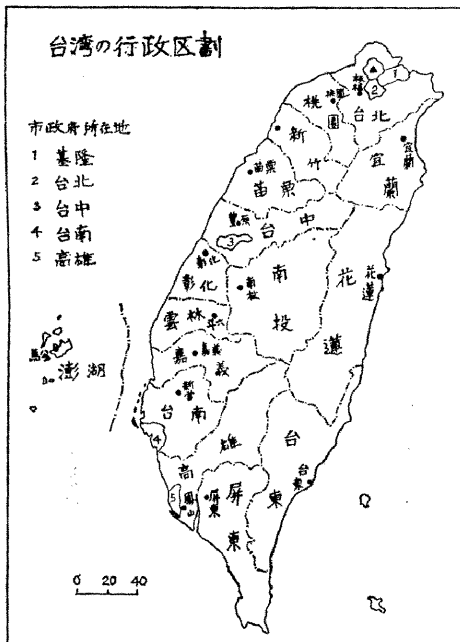
状の地割の中心部に役所や学校教会が広場を中心に集まり、その周囲に農家が円形または楕円形に Rundorf (円村) をなし、散村の原型は今は稀で、長方形の短冊型地割に路村か連櫓式の長方形の集村が多い。

村落の居住型については各国の農業経済学者や社会学者のほか地理学も研究問題にしているが、日本の村落は矢島仁吉博士がよく纏めて述べられ、その原型は古くは周の井田、後魏隋唐の均田にならい大化改新の班田収授法に基づく条里制が、日本各地の平野に施行されたことは、大阪市大渡辺久雄氏の大著「条里制の研究」に明る。奈良盆地の条里制の遺構と垣内集落の如きは最も古く、集居型が展開している。昭和四年頃、ミシガン大学のホール助教授が夫人同伴で奈良ホテルに泊られ、第三回汎太平洋学術大会が東京で催されたことについて太郎教授のガイドブックにある洪積層に新旧二層のあることについてその場所を案内して欲しいと横山栄次校長に求められたので、地学担当の筆者が校長室で紹介されて現場を歩いているうちに奈良盆地の集村型農業景觀に興味が移られて毎日のように盆地内を電車で案内させられ、停留所で電車待ちの間にも絶えず盆地を見渡され、ワンダフルを連呼される。そこで筆者は何がワンダフルだ、アメリカにはコットンベルト、コーンベルト、ホイートベルトと整然とアレンジされているのに、この狭い盆地の雑然たる小規模経営は、恥かしいと言ったら彼は奮然として、何がコットンベルトだ、毎日自動車で走っても見るものは棉花畑ばかり、コーンベルトでは玉蜀黍ばかり、時にファーム

(農場の作業場) があるだけで極めて単調で何等の興味が湧かない。然るに見よこの盆地には(春だった)菜種やれんげ草の花が咲き、麦畑も果樹もあり、道路や水路があり、各集村では農業のほか、大阪からトラックで運ばれた原料で貝釦や膠や草履表や今井町のような僧兵村が紡織などの工業村となったり、モート(水路)が整然として環濠集落などがあり、この一望の下にあらゆる地理的現象がコンバージ(Converge 集中)して実に興味深いと滞在二週間の予定が三十五日にも延ばして、毎日各部落の一戸一戸を調べて歩く。筆者も新学年始まったので帷子教授と交代で案内し、やっと腰をあげて朝鮮、台湾經由欧州廻りで帰国せられ、日華事変までは隔年のように学生同伴で研究に來られ、論文も出された。大戦になって米国の各大学にアジア各国の研究所が付置されたとき、ミシガン大学には日本研究所(Center of Japanese Study)が置かれ、Hall 教授はその Director になられた。戦後直ちに岡山市に、その日本研究所の支所を設けて日本の歴史、地理、政治、経済、社会、あらゆる方面の大学院学生の現地研究所とされた。そして氏は日本の農作業に適する農用機械の製作に対し各工場に補助金を出して、遂に今日全国の農業の機械化(mechanization)の普及に貢献された。終戦後筆者は台湾から引揚げ後、東北大の地理教室の狭い焼残りの部屋に訪ねて來られてもすぐ午後には農村廻りをされ、カスリン台風後の冠水で泥にまみれた後の稲の脱穀作業を見て廻るなどされ、次に一旦帰任後再びアジア文化財団日本支部長となられても、夫人と孫の九歳のストロットン君を伴って仙台に來ら

村落居住型の原型に戻るが、その残っていたのは北海道の屯田兵村で、明治八年札幌近郊であった琴似と山鼻に兵村を配置したときは、兵屋は初め集居型をとって共同作業で未墾地の伐採開墾をして逐次各戸に追給地を附加したが、共同作業は皆怠けて困ったと開道五十年記念祭で御前講演をした屯田兵中尉であった安孫子倫彦翁が語られた。その後は石狩川中流平野では一町五反の短冊型の耕地割に路村型に兵屋を配置し、一個中隊二百五、六十戸に練兵の呼集ラッパの聞える範圍に配置して開墾と共に残りの三町五反歩の追給地を配置した。その後上川平野では、もう北辺の防備は常備軍に委ねて、最初から一戸分五町歩を方形に区分して散居型をとったが現在は路村型に変わった。

台湾は面積三万四千方 $km$ でわが九州の四万方 $km$ よりやや狭くさつま



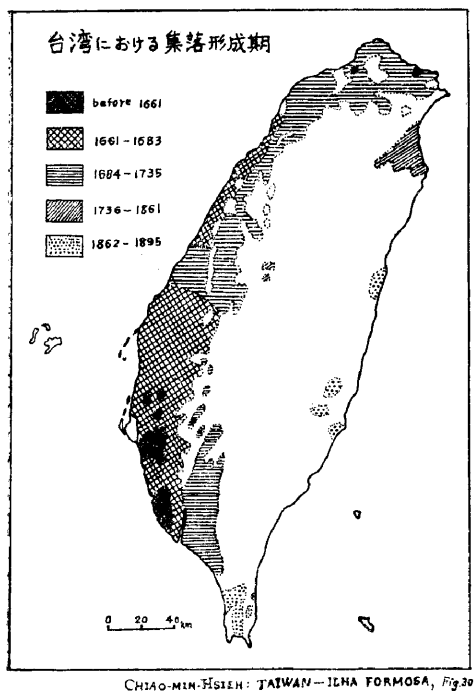


図3 台湾における集落形成期

いもに似た形の島で、島の東部の大半は台湾山脈を主脈とする高山地域で、島の西部に北から盆地や台地と、南半の広い嘉南平野や屏東平野が台湾経済活動の主舞台で、十五県と五特別市に分かれている。漢族の移住は十二世紀の宋朝に始まったというが、その後十六世紀に入ってヨーロッパ人が東南アジア方面から東アジアに進出し、まずマカオに占拠したポルトガル人は、東アジア海上を北上しつつ緑の山々の台湾を海上から望見して Ilha Formosa(美しい島)と呼んだのが Formosa の始まりで、一五四三年には日本の種が島に鉄砲を伝えた位だから海からは見馴れていたろう。次いでスペインが一六二六年に基隆を占領し、湾内にクルベー浜という海水浴場に当時の司令官の名を後

世に残し、同二八年には西北の淡水を占領したが同四二年には何れも放棄した。

一方オランダは同四二年に台湾南部を占領し、安平には Zeelandia 城(紅毛城)、台南に Providencia 城(赤崁楼又は承天府)を築いて軍政行政の中心とし、南部平野に移住漢族を小作人とした王田組織の開墾を行った。その開墾範囲は図3のように、台南、高雄、鳳山方面だけのようであるが、もっと南の屏東平野北部の里港から北の美濃に至る道路に太さ一抱え以上の幹の茄苳<sup>カダン</sup>の巨木の並木が数百米に及び、土地の人はオランダ開拓時代に植えたと言い伝えているから王田開墾は屏東平野北部にも及んだであらう。

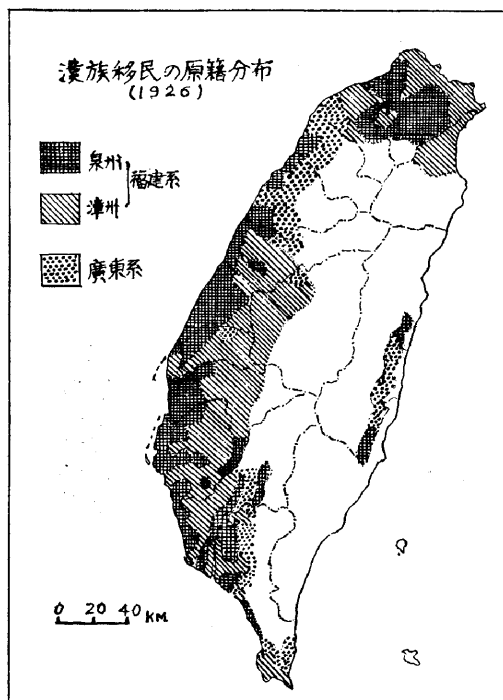


図4 漢族移民の原籍分布 (1926)

当時は日本人も戦国時代から徳川三代の鎖国まで、浪人は和寇として中国近海を荒し、一六二八年には浜田弥兵衛がオランダ総督のヌイツを脅迫して通商を強請した程で、比律賓、安南、タイ、ジャワ方面にも進出して、各地に日本町をつくった。中国は明朝が一六一六年に

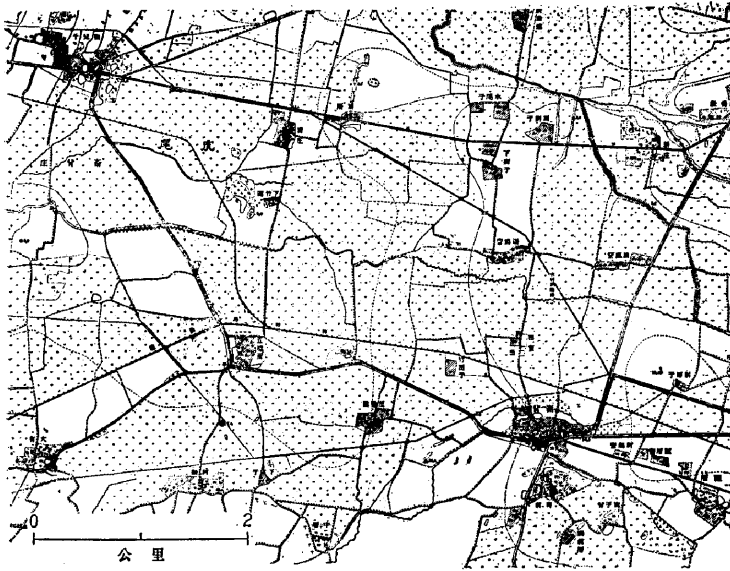


図5 南部平野北部の集村（虎尾鎮付近）  
（陳正祥・台湾地誌，上冊，258頁による。1959）

興った満州族の清朝に押されて一六四四年には清朝に統一されたが、明朝の遺臣の鄭氏は台湾対岸の廈門に立て籠ってその遺跡もあるが、一六六一年に鄭成功（母は日本人の田川氏）は台湾南部のオランダを駆逐して二十二年間統治したが、そのときは図3に示すように台南から北は濁水溪畔まで、南は屏東平野まで開発した。その開発組織は官田と營盤田とで、官田は無資力の個人を小作人として集めた官営開拓であったが、その個人は一族とか同姓同郷の親しい間柄の共同開墾であった。台湾南部の冬の半年は乾燥期で草埔（草原）が多く、最初は散居して開墾に当り、耕地も整備して生産が挙がり各戸の財力が蓄積されるに従って、これら親しい間柄の農民は適当な立地条件を具えた

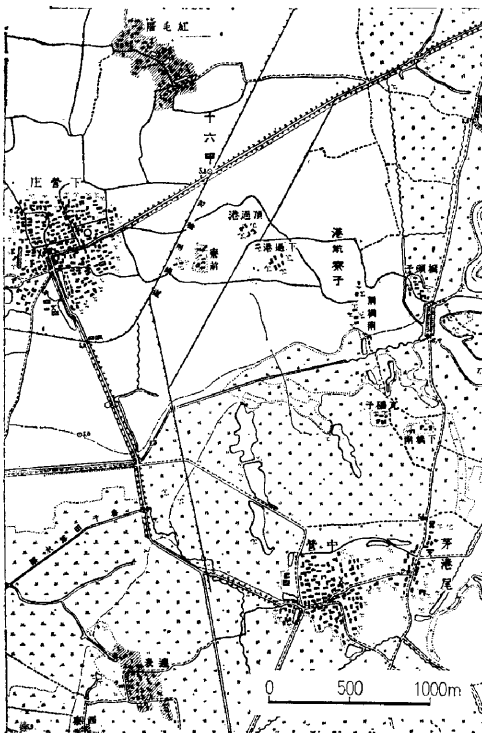


図6 台南市北方30km、麻豆の北約5kmの下營は營盤田としての原型を中營と共に残し、竹藪でかこまれている。

地点を選んでそこに囲壁や竹藪をめぐるせて防備を整えた集村を形成したという。当時はまだ警察力が不備で土匪横行に対する共同防衛のための一段としての一種の村落共同体 (Village community) 又は (Gemeinschaft) の組織と言えよう (図5)。

營盤田は鄭氏の屯田兵村で台南から北の平野に多く、清朝の攻撃に對抗しながら開拓したもので、今でも五軍營、柳營、旧營、新營、中營、下營、林鳳營などの地名はこの營盤田が起源だという。(図6参照)

#### 四 南部台湾の集村の原型

南部の官田は開拓当初は散在する仮小屋に住んで營農し、次第に各個人に相当の資財の蓄積ができると集団強盜などに強奪されるおそれが多く治安警察の十分でない当時としては、共同自衛のためには相互の協力しかない。そこで佃人達は相計って立地的に最も有利な土地を相して、ここに永住の集村を建設した。集村には初めは荊竹という鋭く固い棘が節から出て一株から数本の竹幹が簇生し、人間も竹幹間をすり抜けることは困難であり、竹幹の竹肉は厚く頑丈で折れ難く防風に強く、また鳥打ちの散弾でもよく竹幹から横にそれて畑に働いてる農夫に当ることも屢々あった程で、竹材は器具、建築、役用材としても役に立つ。併し体裁が悪いのか乾季のためか、北部散村に荊竹藪が多いが、南部集村では煉瓦や土や粘土をを木杵に入れて鉄棒で搗き固めて、木杵から抜いて庭先きに並べて陽に乾かした焼かない土煉瓦の土塼で居宅壁や垣を造る。(図版IC) この城垣は東西南北の四角に設け

られ、各面の中央に門扉を設けて夜は扉を閉じ、壮丁が順番で警戒に当る。対岸の福建や広東の部落にはこの城垣や門扉の傍に多く高い望楼があったが南部台湾では見当たらない。夜間閉門後の出入は門扉の横の下に狗門<sup>カウツ</sup>という狗の出入する門という意味の潜戸があって、予め定められた合言葉(例えば山といえは川)で狗門から入ることは許された。さらに門扉の外側には豊作と防疫を祈る福德正神(土地公<sup>トチコウ</sup>)を祀る小さい廟宇があって切花や線香で村民の安全祈願を祈る。この型は南部平野の中部には少なく、東の山麓地帯に多く残っている。

次に集村内部の家屋の構造と配置であるが、何れも似た程度の土塼造りの真壁の小型の農家(図版Ib)が図5・6のように雑然と配列して、各農家にはその屋敷を囲む垣根もなく、隣同志の庭は共同の粗干場や作業場となっていて、別に道路としては迷路のような踏付道があるにすぎない。各家の敷地は共通かというと、それぞれ境界はあり所有地は定まっているというが外来者には分らない。従って村落共同体ではないが、開拓当初からもう何代も続いて一つの城垣で囲まれた集村に生活している人達は、お互に極めて親密な関係にあるので血族部落 (Stem Cell) かとあって、部落内通婚で血族関係が多いかと聞くと、中国では昔から「同姓不婚」で、たとえ赤の他人でも同姓間の通婚は認めらず、これを敢えて犯かせば犬畜生と嘲けられ指弾される。南部の王田や官田は官の小作人として同郷人と雖貧しい佃人が集められたから雑姓が多く、同姓部落でない限りは血族的にも親密な関係にある社会協同体を形成したと見られる。それで官營の工事関係な

どで他から来た労務者がこの集村内に一時借家や間借りしようとしても多くは拒否されて部落の外に仮小屋を建てて住んでいる。しかし台湾南部の縦貫線沿線や道路に沿う集村の多くは商工業が入り込んで都市化して古い集村の原型は認められない。

南部平野の漢族移住の際には原始林や草埔ばかりであったかというに、康熙末期の台湾視察記録である「台海使槎録卷八の「番族雜記」と「台湾帰化土番」との項には、「数十若くは百数十戸を以て社をなし、環らずに薊竹藪を以てす」と誌され、南部台湾・平埔蕃(平地蕃の意)はすでに集居型の集落を形成していたことを示す。移住漢族はこれに対抗するために集居型を採ったと推定され、後には移住漢族の圧迫のため山地に番社を造って回避したり、中には化蕃として漢族に雜居同化したらしい。中には漢蕃交代集落ともいえるものもある。<sup>(七)</sup>これは灣裡社の善化や、蔴豆社の蔴豆でさらに後述する。また雲林東南の山麓地帯の古坑郷の新庄という百数十戸の小集村には深さ十五、六米の深い素掘井戸が二ヶ所あり、この二井の水で全部落民の飲料水を供給しているが、部落民はこの二井は昔ここに住んだ蕃人の掘ったものと伝えられ、井戸端には蕃刀を研いだ大砥石が二つづつも置かれてあり、部落にはまだ戸籍上数戸は高砂族になっていた。

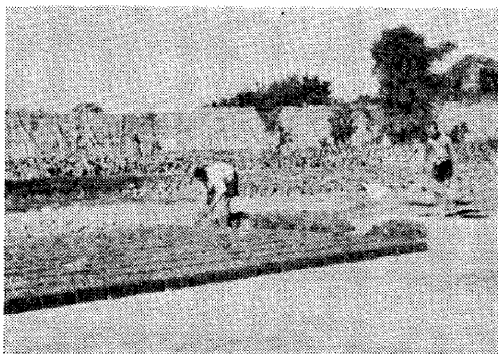
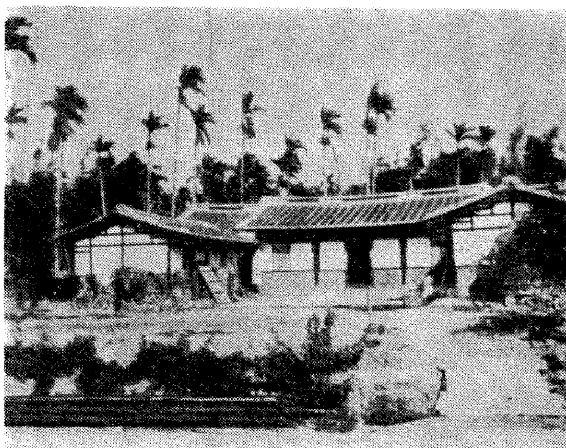
このような原型に近い集村の実地調査は、われわれ異民族にとって、その真相を知ることには至難な業であるが、この南部台湾の平野は秋から春にかけての乾季のために甘蔗栽培の適地で、旧式糖廊<sup>ズ</sup>といって水牛に臼を挽かせて甘蔗茎をしぼって黒砂糖をつくるものもあった

が、日領時代は大日本製糖、塩水港製糖、台湾製糖などの諸会社が互に原料採取区域を協定して各工場周辺にその区域が纏まっていて原料運搬の輕鉄があり、それに客車を連結して地方民の交通にも利用させた。そして各社の原料採取区域の各部落には各社の担当農務係が割当られ、甘蔗の栽培契約やら、甘蔗原料を担保とする前貸(病気や災難で不時の必要の金の融通)などの交渉で、日本人の農務係員は担当部落の人々とは親密で、また部落内各戸の事情にもよく通じ、誰が物識りだとか、史実に明るいかまで知っている。各会社工場には立派な俱樂部があり、日糖ではどの部屋にも「雨田」書の額があったが、それは社長藤山雷太氏(愛一郎氏父君)の雷の字を二分したもので、筆者はそこを根城によく輕鉄を特別なガソリン台車を利用して前記の農務係員の案内と通訳で調査が順調に進捗した。

台湾の製糖会社と原料生産の農民とは、ジャワの如き強制栽培ではなく契約栽培であり、唯山麓の不毛の扇状地などを会社で開拓した会社の農場は極く一部にはあったが、ジャワの如く農地を取り上げ、その農作業に農民や日雇労務者を鞭を鳴らし乍ら酷使した事実は全くなく、社有農場事務所にも滞在したが、労資関係は極めて円満であった。勿論個人的には性格や他の事情で若干の葛藤はあったろうが、それも一度も筆者は見聞しなかった。それについて台湾総督府は昭和初年、台湾の植民事業のうち特に糖業の実績を賞讃される予定で、東大の植民政策学の矢内原教授(後に総長)を招待して島内一巡視察をして帰ったら彼は「帝國主義下の台湾の糖業」とかの著書を出して非

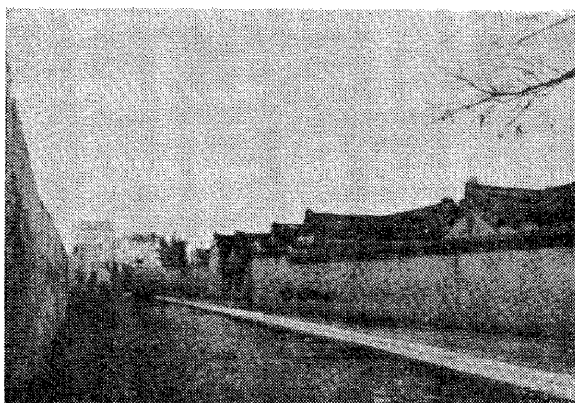
a 麻豆大埕角の農家（真壁構造）

（背後の立木は檳榔樹その蔭に竹藪あり，左方及前，右方に柑橘あり，前方の道路は近年改修）昭10. II



c 土塙造家屋の震害多きに懲りず，なお盛んに土塙を造りつつある状況（豊原郡潭子庄）

b 土塙の壁に，竹材を柱や屋根組に用う（震害家屋）



d 広東省澄海県東墩郷新亨里左側は北塹で先方に守望楼と隘門がある

難しらしいが、当てがはずれた台湾総督府はこの書を島内発禁にした。戦後内地で読む機会を得たが、下情に通じない上級官吏の通り一辺の説明をきく視察だけでは実情は捕捉できるものではなく、生活体験を通じて肌で感得しなければ真の実情は把握できない。よく東南アジアのプランテーションと同一視されたものだが、通り一遍の視察旅行で学問上の著述としたことは軽卒の誹は免かれまい。

## 五 集村の拡大と都市化<sup>(九・一〇)</sup>

南部の集村でも、平野の中部の地の利を得たところは、農地の拡大と住民の増加で狹隘を告げ、これを拡大するか新たに別の集村を建設することになる。集村の拡大の好例は台南特別市から北方約二十五軒の麻豆鎮に見る。ここはもと麻豆社という熟蕃（平埔蕃の漢化したもの）の蕃社で、蘭領時代には学校や教会を設けて教化に当り、また鄭氏時代順治年間からは漢族が多く移住して、蕃社から未墾地の開墾権を得て蕃租を納めていたが、そこに漢族の集村を造るに当って康熙三十年頃すでに出身郷里別に一つの集村をつくり、東西南北の四区に分けて「麻豆四角」と称した。

この地は曾文溪の北岸に近く、かつては水運の便もあり、部落外に昔の河港の跡も残っていたが、畑になって居り土中からアサリのようなブラッキッシュの貝化石を拾ったが、河道の移動の激しかったことと、川の埋積力の大きいことから埋まったが付近に河口港のあったことも想像できる。川に近いので土地も肥沃であったから部落の発展も

著しく七十年後に四角が八角となり、また咸豊年間にはさらに十二角となった。これは各角の人口増加による分角であるが、各角に固有名あり、四角から八角になるとき、南角は巷口角といいその東隣りに晋江宅角を分角し、東角からは西方に什二路角と厝祖廟角を、西角の後牛欄角から南勢角を分角し、咸豊二年北角の一部に関帝廟を建立して関帝廟角として八角となり、厝祖廟角と什二路角とから加蓋邦角、東角から大埤角、後牛欄角から油車角を分角して十二角となった。これ

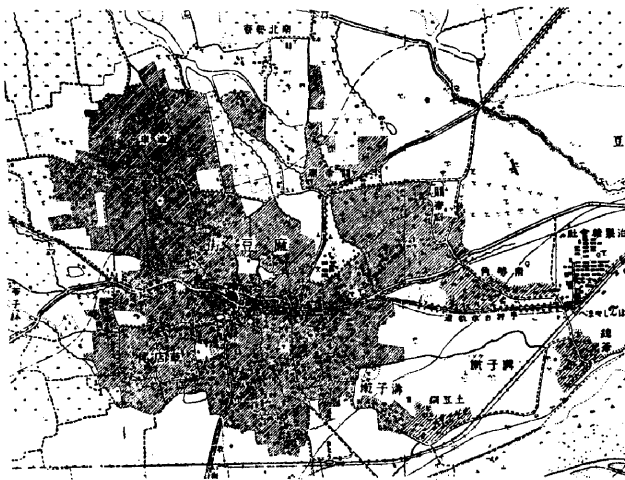


図7 麻豆街麻豆1:50000

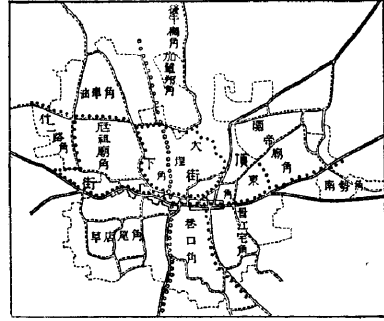


図8 麻豆の角の区分（白丸は頂街と下街の境界）



図9 麻豆の商店街と各角の農家の配置とその平面図

らの角にはそれぞれ廟があると共に居住者に同姓が多い。即ち草店尾角の孫姓と林姓、巷口角の李姓、晋江宅角の陳姓、厝祖廟角の林姓、東角と大埕角の郭姓、油車角、関帝廟角の陳姓、南勢角の林姓と陳姓、什二路角だけは雜姓である。

この角は勿論行政区画ではなく、統計資料は得られないが、各角内の住民は互に親密な関係にあり、各角内の廟の信仰団体で日本の講に近い、一つの小さい社会協同体をなしているから聴取調査資料でも信憑性は十分にあると信ずる。ただ麻豆鎮全体の信仰する五府王爺廟の祭事や廟の修理などの費用は各角住民が負担しているという。（図7・8・9参照）

麻豆の農業集村が四角から十二角に拡大されて人口も増加するに伴い、集村の中央を東西に貫ぬく幅十五米街路の立派な商店街ができ、中央部の十字路から東部を頂街、西部を下街と呼び、この商店街は東は縦貫道路と縦貫鉄道駅に、西は佳里鎮に通ずる主要街路となつて交通も商況も共に活発である。然るにこの商店街の両側の裏は昔ながらの農家が雜然と配列されているが、東方の貧しい集村の農家とちがっていずれも広い屋敷とその周囲に広い畑地や果樹園や檳榔樹の並木もある。畑は多く蔬菜園だが、中には甘蔗園もあり、それぞれの家に垣根を繞らして富農が多い。（図版I a及び図9参照）しかし麻豆鎮は東西の中央街路には隘門はないが集落の四周には竹籬で囲んで、他の古い原型を止める集村と同じである。しかし竹籬の外は広い畑地が展開し、主として蔬菜栽培をなし、乾季には曾文溪に近いので地下水

が浅く、各所に素掘り井戸を掘り、はね釣瓶で水を汲んで天秤の両端に大きな如露で蔬菜類に灌水している。素掘り井戸の掘り上げた土は井戸端に積んで、不用になればその土で井戸を埋めて元の畑にする。この蔬菜類は台南や高雄の都市の市場向けで収益も多く、麻豆鎮の集村内の富農の多い理由が分かった。

集村が人口増加と共に拡大するのに城垣や竹籬を払って分角する麻豆に対し、中国の広東省澄海県東墩郷では、一軒ばかり離れた水田地帯内に別に高い土塙をめぐらし、隘門や望楼まで設けた東享里という分村を造った。これは汕頭から澄海、潮州に通ずる主要道路の西側に接しこの道路に面する側だけは塙の外に道路との間に深い壕が掘ってあった。これは汕頭に注ぐ韓江の沿岸に近く水田の水利のためではな

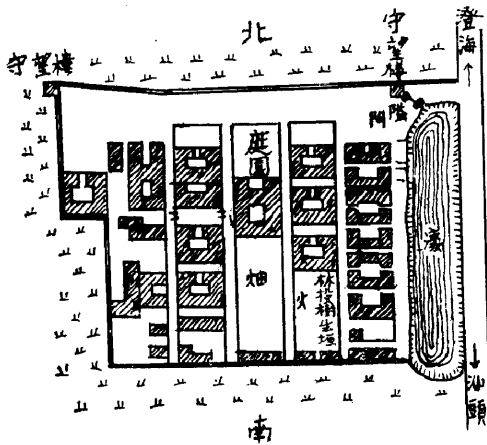


図10 麻豆省澄海県東墩郷新享里（筆者の歩測で作製）昭和10.

く、防衛が主であろう。部落の北東隅には高い望楼があり、北東隅の入口の隘門の傍にも守望楼があり、楼上にアンペラを張って守衛が居たが、その眼を避けて秘かに潜入して歩測で図10の家屋配置図を作ったが、古い集村とちがって南北に五条の道路があり、それに面して新築家屋が整然と配置され、まだ家の建たない空地は畑と果樹園になっていた。親村である向側の東墩郷は分村の東享里よりも数倍の規模で、福建系の反棟と異なり、屋根は直棟で互に平行して密集していた。翌日宿泊地の汕頭から新享里に来て家の姓氏の分布を調べたが、林姓と黄姓が多いが、他姓もあって同姓部落ではなかった。その間守望楼の守衛が筆者を認めて村人と語り合って怪んでいるので、排日の折の昭和十年、蔣介石が一時「近隣敦睦令」を出した折とは云え、到るところの望楼や高塙には抗匪排日、稀に抗赤匪排日と大文字が書かれて、入国査証も発給の見込みがないから日本の汕頭領事館には自分の危険において潜入するなら、まさかすぐ死刑にはしないだろうから、すぐ館員を派遣して引取るよう手配するという原田領事の配慮で潜入したのだから、脱出して向側の路傍の共同便所に飛び込んだ。ところがこの共同便所は大きい長方形の溜の上に五、六枚の厚板を並べて仕切りはなく、板に跨がって三、四名が互に話合い乍な暢然と排便をし、一種の社交場のようなものには驚き、小便だけで便意を失って匆に出て了った。母村の東墩郷に潜入したかったが、隘門の警備が厳しいようで諦めた。

## 六 北部散村の原型

台湾西部を南北に劃する濁水溪から北は員林平野、南投平野、台中盆地、苗栗平野、新竹平野、桃園台地、台北盆地などと台地や丘陵で分割されているが、その漢族による開発は図2に示すように海岸地帯の一部を除いては鄭氏が清朝に帰順してから以後の康熙初期から雍正年間に亘り、その開発は南部の官田營盤田などと異なり、大祖戸開墾といわれ、資本家や開拓組合が政府や蕃社から広い未墾地の開墾権を得て墾主と称して台湾南部や本土の福建広東方面から多くの佃人を墾丁として招致し、原始林を十数甲（一甲は約一ヘクタール）〇・九七八町歩）から数甲に長方形に林帯を境界線として区分し、各墾丁はその割当地割に佃寮を建てて開墾に従事したのが、北部散村形成の原因で

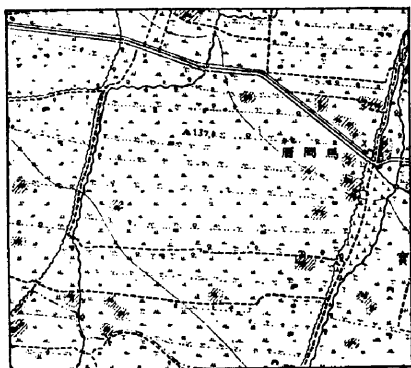


図11 台中盆地北部の地割と境界防風林と散居農家

ある。

尤も開墾当初は原住民の高砂族の抵抗や土匪の横行に対し、墾主は隘丁（警備員）を隘寮に居住させて警備に当らせ、また開墾当初は土地区分などの作業のため集居させ伐採と地割とが済んでから各地割に散居させた。地割境界の防風林帯は台中盆地でも山麓地帯で風の当ら

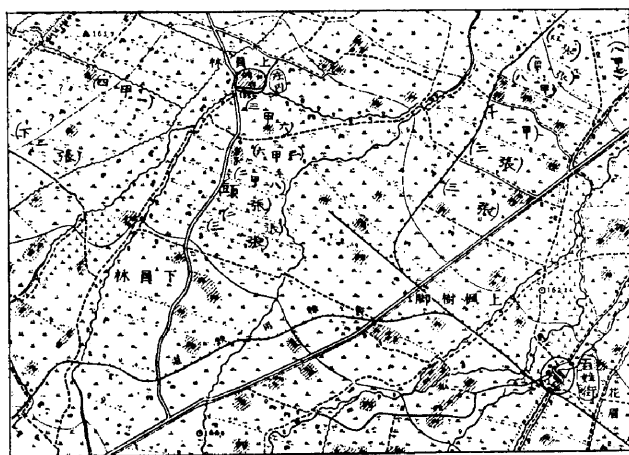


図12 台中盆地北部の張達京開墾地の地割名と散村、円は開墾当初の集居の庄内と百姓街を示す

ない場所では耕地を広くするためか後に伐り払ったものもあるが、この区分された耕地は図11と12のように著しく長方形で、それらの区分地の地名にその面積を番地のようにつけた。図12に筆者が聴取りで書込んだように<sup>(二)</sup>三甲六とか四甲一のほか端数のついたものもあり、頭張、

二張、三張の張はどうも順番を示したらしい。図12右下の百姓街と左上の庄内を輪でかこんだのは、開墾当初番人や土匪の防衛や物資補助のための基地としての集居の跡を示すが、開拓民相手の商店はまだ残っていた。地割も済み各区の伐採開墾を始めて見ると、各佃人に割当てられた耕地面積は測量の不正確から、開墾契約書（契字）の面積よりも遙かに広く、且つ異状に細長い地割りであったために、割当耕地の全部を一戸の佃人では営農に手が廻らなかつたので、各佃人は自ら何戸かの墾丁を勝手に自分で雇って小作させた。地積に何張とあるの是一张は五甲で、二張、三張などは到底一戸の営農経営に堪えられるものではない。この調査は付近の神岡庄在住の郷土史家の豊原公学校訓導張崑山先生の御案内によるものである。

最初入植の佃人は後に入れた墾丁から小作料をとり、それと自分の分とを合せて最初に開墾権を得た墾首に納めたが、これを小租と云い、各佃人からの小作料（租石）を集めて墾首は政府に租石を納めたが、それを大租といったので、その大租を納めるのを大租戸、小租を納めるのは小租戸といい、この方式の開墾を大租戸開墾というようになった。何張という広い地割りの小租戸では佃人の小作料で生活して農業は殆んど片手間で裕福な生活をなし、或る小租戸で末子の中学生

の通訳できくと、小租戸はもとは小作人であったが、今は地主同様土地の管理一切は委されてただ小租を収めさえすればよいという。小租は多く物納で、各地にそれを収納する大租戸の公館という倉庫をもった事務所があつて公館とか公館番とかの地名にもなっている。

この台中盆地北部の大租戸開墾は、原住民である平埔蕃の岸裡大社の通事（通訳）の張達京が墾首として雍正年間に行われたので、岸裡大社の位置は現在台中県政府のある豊原鎮の西二軒にあり、平埔蕃の大部分は東方の埔里盆地に移して大租戸開墾に充てた功績で、岸裡大社の頭目はここに残って清朝から土地提供の功を褒賞した刺繍の紋のついたガウンのような立派な官服や、瑪瑙の玉を緒で連ねた首飾などを見せられた。今は潘という姓を貰って帰化したという。高砂族は狩猟民族で男子は原始林で猪や鹿などを狩り、婦女子は居宅の周りの狭い畑で自家用作物をつくる自給自足の生活をしていたので、原始林が広く残るのが当然であつたろう。岸裡大社には原始林時代の楓の巨木が残っていた。

大租戸開墾の大規模のものはこのほか台北盆地、桃園台地、新竹平野にかけての林本源、新竹県南部から苗栗にかけての金広福（広は広東系、福は福建系で、両者の協同組合）が主で、宜蘭平野では一部は呉沙、柯有成等が大租戸開墾権を得た。これら大租戸開墾の墾首はただ政府から広大な未墾地を得て原始林の伐採と地割だけではなく、張達京の開墾の様に水田開発のために境界の並木の両側に給水路や排水路もつくり、境界線を示す並木は薊竹や相思樹が多いが、この地の原

始林は楓（フウ）（学名は *Liquidambar formosana*, Hance）で、後にその葉は野蚕の飼料として、繊維の太い絹織物も製造したが、余り発展しなかった。楓樹の多かったことは地名に楓樹林とか図12にある上楓樹脚などの残っていることから察せられる。

## 七 桃園台地帯の散村

桃園台地は淡水河が台北盆地の陥没で石門で南から東に直角に曲るまえに北流して造った古い扇状地と思うが、厚い所謂台地礫層とその上に赭土層を覆っている。この扇状地の形成過程は市川雄一<sup>九</sup>氏が論じ、半径二十軒、面積約三十万軒に及び、扇頂高度は海拔約三百米で北々西に扇状に海岸に達する緩斜地面をなす。この扇状地の農業開発に必要な水は淡水河（大嵙崁溪）が深い谷を穿って流れるので、初めは利用できず広い扇状地面は専ら雨水の溜池灌漑によって米田を経営した。一時は三十万軒の広い扇状地面には八千個の溜池が恰も「アバタ」の如く広く分布したが（図13）、この溜池の水利管理のために各農家は当然標式的な散居型の分布をなした。何故にこのように密な灌漑用溜池を造ったかというに、この扇状地であった桃園台地の赭土の厚さは三〇五米に過ぎず、赤い粘土質であるが、池の深さは二〇三米以上には掘れない。それはその下に台地礫層という扇状地堆積層が厚く発達して漏水するからである。それで緩斜面の赭土を掘って低い側にだけ半円形に盛り上げて堤をつくったので、池の形に半月形が多い。溜池を埤と称するが夏の驟雨や冬の霖雨の水を溜めて翌年の春の

田植に利用するので、埤の水面一に対して水田面積三の割合の灌漑能力しかなく、しかも年一期作に止った。一九二八年に大嵙崁溪の石門に洗堰を完成して河水を取水口で毎秒一六・六八立方米の水量を、初めは溪の北岸に沿うて多くの暗渠を経て台地面約海拔百米等高線に沿うて東西に水路（圳）を通じ（図13参照）、その水を百米以下の水田地帯に通水し、その通水面積は台地面の約三分の一に及んだ。この水利施設を桃園大圳といったが、効率の悪い溜池は埋めて水田とし、効率のよいのは残して圳の水を貯水して、今までの米の単作を、早春から夏と夏から晩秋の二期作を可能とし、米の増産に大いに貢献し埤が水面の三倍の水田しか灌漑できなかったのを一挙一〇倍にした。この桃園大圳は、後の南の嘉南大圳と共に台湾の二大水利事業であった。

この桃園台地には東に桃園鎮、中に中壢鎮、西に楊梅鎮の三都市があり、東部は福建の漳州系、西部は広東系（図4参照）の開拓移民で、広東系は福建系よりも後に移住し、それも福建移民から取残された条件の比較的悪い地方が多く、本国では相隣する省であるのに、言語は異なつて通ぜず、家屋構造も異なり、体格も容貌も福建系よりも日本人に似て気質も荒く語る日本語も日本人に近い。福建人の婦人は纏足して家事に専念するのに、広東系は纏足せず家事のほか男子に伍して野良仕事にも精を出す。それで異国人同志のようなものであるから、桃園中心の福建系と中壢中心の広東系とが対立して分類械闘が度々あったが、その対立のために防衛を固めるため、同系が集居型をとらなかった。「三年小乱、五年大叛」といって当初の台湾は治安の維

持が悪かったが、開拓当初は生活に逐われて互に闘争を繰返す余裕はなかったものと思う。

かつて筆者が桃園台地の西南方の関西地方の調査に研究室の図工の張君を通訳を伴って行き畑に働いている農民にこの先きの道筋を聞かせたら日本語で聞いている。「何だ日本語でなら僕が直接に聞くのに」と云ったら彼は声を秘めて「先生ここは広東部落ですよ」といって、いつもとちがってこの旅行では緊張した気分である。或日大木の蔭で弁当を二人で食べていたら、そこに四、五才位の男の双生児が寄って来て互に何やら話す。やがて張君は食後その双生児の家に入って茶をもらい色々話す。彼の云うには双生児が広東語でなく福建語で互に話しているのもその家を福建系と思って訪ねたが、やはり広東系で近年までその家の人は台中市で商売してつい福建語を覚え子供の方は常用語となったのだと種々話し込んでいた。また筆者独りで別に関西の街の日本人名義の宿屋に滞在したとき給仕に來た女学生服の娘が、中国訛のない正確な日本語で応対するが、窓の下で子供等と遊んでいるときは台湾語である。顔も日本人娘だし、部屋に來たとき筆者は「あなたは台湾人にしては日本語がうまいし、日本人にしては台湾語が甘いが、一体どちらか」ときいたら台湾人だといったが、これがやはり広東系であった。前述の広東省の汕頭から潮州を歩いたとき、隣の福建省の廈門から漳州を調べた後であったが、韓江の渡舟の中などで日本人によく似た相客によく同船したが、交際すると広東系は福建系よりも日本人に気性が似てコセコセして気も荒いという。福建系にはオ

ットリして人情に厚い人が多いようだ。これら氣質の相異も開拓当初の分類械闘の一因になったろうと思う。

## 八 集村地域と散村地域との遷移地帯

南部の集村地域と北部の散村地域との境界線は、西部平野の中央を西流する濁水溪と見られる。濁水溪は図14のように台湾山脈中部の広い流域の水を集めて八封丘陵と触口台地に二水の隘所に集ってそれよ

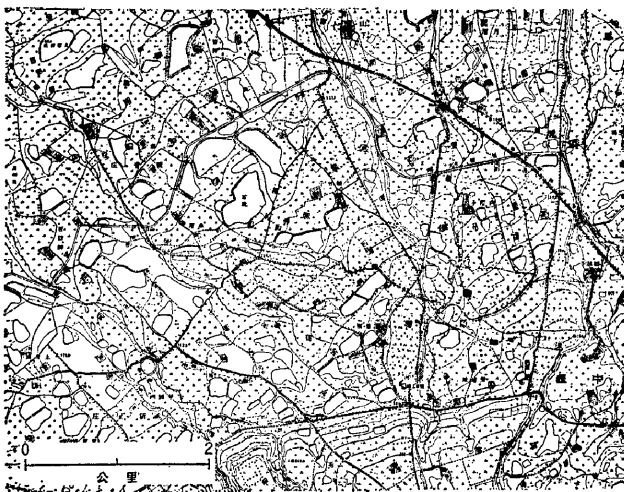


図13 桃園台地の灌漑用溜地(埤)の分布と等高線 120m から 100m 線に沿うて 東から西に通ずる桃園大圳(圳は水路の意)(陳正祥, 台湾地誌上冊, 259頁)

り西は、平野の上にできた成育扇状地であったか、多くの分流によって海に注ぐ。二水の隘所から北西流して北斗鎮の南を経て鹿港の南方で海に注ぐのを本流としているが、その水は多くの圳路に分水されて員林平野の肥沃な水田地帯を養って、稲作のほか水田芭蕉や員林椪柑（ボンカン）として台湾の柑橘類中の王者として輸出されて美味が賞讃されている。この平野の縦貫道路に沿うては商店街村もあるが、多くは水田地帯の圳路や農道に沿うて路村をなす。圳路に沿うものは掘った盛土や自然堤防に沿うものでドイツでも *Deichsiedlung* と呼び、日本でも多く、また果樹や庭木類の栽植を行っているのと同様である（図15・16）。

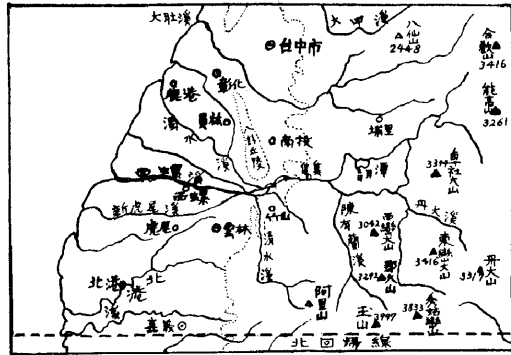


図14 濁水溪流城図

分流で西流するのは西螺溪と呼び、事実上の本流であるが、河床堆

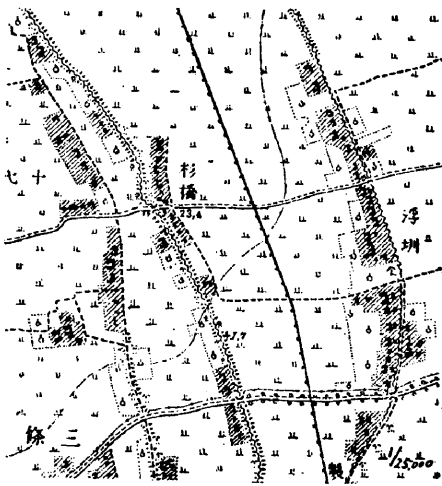


図16 員林平野の路村、特に圳路に沿う *Deichsiedlung* が多い。員林と彰化の中間地帯

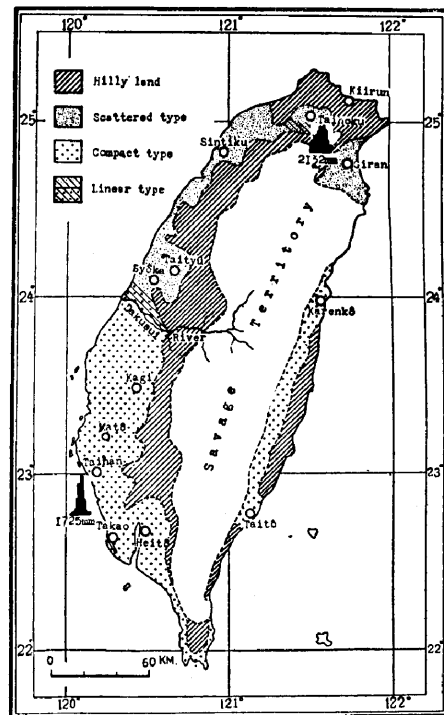


図15 北部散村型地域と南部集村型地域との遷移地の路村型集落の分帯区域を示す

積が著しく小中洲が多い荒れ川で、堤防のほか岸から直角に制水堤も出しているが、流路の幅も広くて増水期の徒渉は不可能で、二水の隘門を通る縦貫鉄道の西に高所から鉄のロープを渡し、それに籠を吊して渡るのだが、川の中央部に来るとロープが重みで下に撓み、乗った籠の底が水面に触れて水にぬれて胆を冷やす。しかし縦貫道路は西螺鎮に長い橋を架して、彰化から員林平野と、南部の西螺、斗南を経て嘉義市に通じて、前述のように沿道に街村もできた。

濁水溪の名は台湾では宜蘭濁水溪や大濁水溪など類似の溪名があるが、ことに濁水溪の水は泥で黒く濁っている。それはその上流が漸新統から始新統の古第三系の粘板岩系の断層破碎帯の石墨のような粘質の微粒が川水に流されるので、時々そのような破碎帯の崖崩れで、黒煙をあげて山地傾斜から河流に黒泥が流れ込むのを観察した。それで濁水溪の黒泥は腐植土のような風化土壌でなくとも、この黒泥の沈澱した平野は黒土で、水田では水漏れは少なく水もちがよく、水温が日射を吸収して高まって稲の成育をよくし、畑作でも同様で旱害防止にもなる。但し濁水溪本流上流では日月潭に発電用の水源補給用の圧力トンネル通水のため堰堤を造ったときは、上澄みの清水を余水として流しているので、丹大溪との合流点では、丹大溪がお齒黒（鉄漿）のような黒流と清濁合せ呑む奇観が見られて下流の濁水溪はやはり黒い。

濁水溪下流の西螺溪南岸の西螺鎮も西螺ザボンと呼ばれる大型柑橘類の産地であるが、乾季には樹勢衰え果実の味も落ちるので、庭木の

ように各家庭の家の廻りに植えて冬季の乾燥には灌水する。しかし広い果樹園では防乾が十分でなく味もよくない。西螺の公学校でも校庭にザボン園を作ったが、児童の常に通う道傍の実是他より甘いのは、根をよく足で踏んで樹根の乾燥を防ぐためと校長は説いた。

## 九 台北盆地東部の散村と家屋構造

台北盆地は今は大部分都市化して了ったが、筆者が台北帝大在勤時代は同盆地の北東部にはまだ広い水田地帯で農家が散居型に配置されていた。（図版Ⅲa）その散居農家の各戸について研究の余暇各戸を精査して見ると、出身は大体福建省の漳州系で、各家屋の建築年代からその移住は凡そ三期に分けられる。第一期は二百年前から百年前の乾隆初期まで、第二期は百年前の嘉慶から日領まで、第三期は日領時代である。各農家はそれぞれ後三面は薊竹藪で囲まれ、前は塀または刈込んだ生垣もあった。家の前庭には中南部にも屢々見られたが池があり、衣類や野菜を洗い家鴨が泳いで居り、中南部では飲料水に供したが、飲み水は必ず沸かして生水は一切飲まない。或る老婆に水道も通じたのになぜ池を残すかと聞くと、池に雨水が溜まるように自分の家に金が溜まるからだという。また家の周囲の竹藪も戦時中食糧増産のためこれを切り払って果樹園か畑にせよと文山郡役所の役人が強請して廻ったが、何かの理由でもの役人が左遷されたので、住民達は竹藪は各家の守護神であってそれを刈り払わした罰だと言う。このように生活上その土地の環境に適合した施設を先祖からの経験で一定に型

に固定した様式を、迷信や神仰の態ちで永く伝承しようというのも興味が湧く。

家屋構造は建築期によって型式を異にし、第一期のは概ね水籬起（起は建の意）で土塼造で屋根棟は反棟の燕尾式で、棟端に棟飾として鴟尾を附す。第二期の出展起は家の軒先を支える腕木を出している家で、南部の家と同じく真壁で柱が壁面に露われ、屋根の棟端には鴟尾の飾りは無い。第三期の火庫起は赤煉瓦造りの大壁で柱は外側に露さない。家棟の反りは少なく馬背式とも云い棟端に飾りは無い。火庫起というのは総煉瓦造りで不燃建築とか防火建築の意をいう。福建系の家根棟は広東系の直棟とちがって反棟であるが、それは緒の両端を一直線に張ったのを少しゆるめて反りの程度が決まるので、カタナリ一曲线である。

家のプランは様々だが多くは正面に向って母屋とも云うべき正身があり、その両端から前方に裾屋の護竜又は護廊があつて、全体として平面図では凹型が基本となっている（図17・18参照）。さらに拡張す

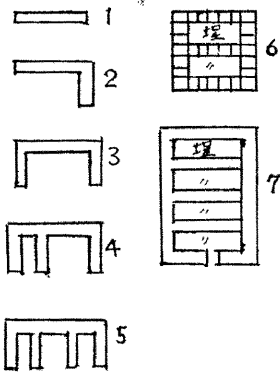
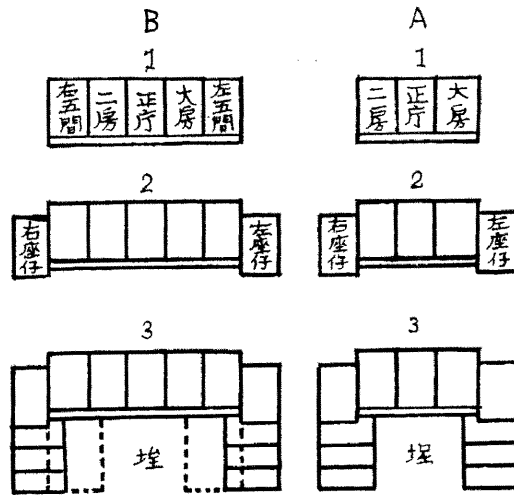


図17 家棟の配置 (6, 7は豪家)



（座仔なく点線の位置に護龍または五間連護龍起）

B		A	
3. 五間連護龍起	2. 五間連護龍起	3. 三間連護龍起	2. 三間連護龍起
1. 五間起（五房）	1. 五間起（五房）	1. 五間起（五房）	1. 五間起（五房）

図 18

るときは護竜が図17の4・5のように三棟または両側に二棟ずつの四棟となる。さらに富豪の家は規模が大きく棟数も多く図17の6・7のように三落起や五落起（落は棟で起は建の意で、三棟建や五棟建でみな棟数は奇数で、窓の棧の数と同様偶数は不吉とされているらしい。台北市西南の板橋や台中市南方八軒の霧峯の林本源の両邸宅の如きは、図17の7の型で、中庭の埕を隔てて三落起や五落起で、霧峯では建物の周囲に多くの小型の貧家が、壁に接して建ち並び、何かと林家から施しを受けているように見えた。中国では昔は社会政策が整わず、貧民の救済などは一族や同郷、富豪が行ったが、都市には乞食が多いこ

とはパールバックの著「The Good Earth」の訳書の「大地」の通りで、厦門市でも昼飯時になると街路に乞食が右往左往して、店頭で食事している店員たちから一箸つづの食物を碗に入れて廻って腹を満すと物蔭に昼寝をむさばり、筆者の泊った福星旅舎の庭内には多数の乞食が寝ていて、夜間暗がりや帰宿中過って足など踏みつけても別に笑って怒りもしないが、皆青ぶくれして栄養失調状態を呈していた（昭和一〇年頃）。この貧富の大差が中国の共産革命の素因と思う。

次に家の部屋割だが、正身の中央の間は正庁と云い土間で床板はないが、椅子卓子があつて応接間であり宴席の場ともなる。正庁の奥の中央には大きな祭壇があり、神仏や祖先の位牌を祀る。正庁の入口は概ね観音開きの嚴重な扉があり、庭には石段で下りる。正庁の向つて右は大房といつて一家の戸主の居間で、左は二房で両親が居れば長男の居間となる。各居間も土間であるが、奥に薄手の蚊張を吊つた大きな寝台が一つずつ置かれてあり、正身の両側に中庭（埕）を隔てて相對する護竜は、正身より一段棟を低くし、床も約三十糎低い。教室に分かれて共に土間で内庭の壁に沿うて狭い土間の通路があつて各室を連絡し、泊客や下婢、雇人の居室にもなるが、妾のことを側室とも云うのは護竜を居室としたからであろう。各室の窓は高くて縦の棧で嚴重に賊の侵入を防いでいる。但し棧の数は必ず奇数である。このように窓が小さく、棧があつて採光不十分で蒸暑くて昼でも薄暗いので、よく正庁の扉を開いて老婆が針仕事しているのを見かける。

「九世同居」を理想とするので家族数が増加すると正身は建増しせ

ずに護竜を手前に建増しする。そのとき棟高は元来正身より低いので、護竜建増しのときも棟は元の棟端より一段低くするかわり、傾斜をつけて新しい建増の棟は傾斜して元の棟高にしてあるものもある。しかし家族が死亡や移住で減少すると護竜の端の部屋を取払ったが、後

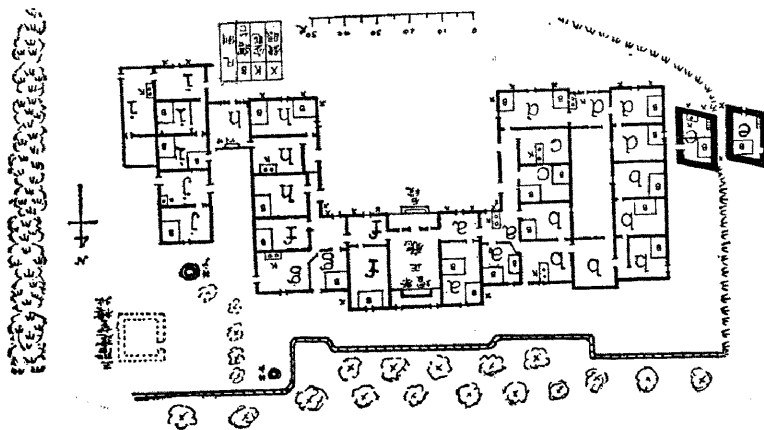


図19 台北市下内埔392の陳氏宅の平面図  
a～jは同居世帯別の部屋割を示す（aは陳）

は毀さず他人に間貸しするようになった。しかし「同姓不婚」の鉄則があり、これを犯すものは犬畜生と嘲けられたが後にはその風も緩和されて他姓の下宿も許すようになった。そして正身と護竜との接する間は時に角間と云われて共同の炊事場になって正身の両端にあるので同居人も共に幾つかの竈（かまど）で好きな食物を炊ぐ。

居住構成は図19に示すように一正身左右二護竜の中型家屋で、戸主の陳財旺氏（a）のほかbは陳杞欽、cは陳金榜、dは陳玉琴、eは陳財潘、fは陳昆琢、gは陳財清、hは陳冬だが、iの杜金声とjの蔡朝枝とは借室で、他は陳家一族の所有で、正庁は陳家の共有である。父祖の代は陳家は一つの大家族であったのが、これでは所得税の賦課率が高くて負担に堪えないから父の陳財旺時代に独立生活者に世帯を分け部屋的所有権も分けたが、iとjとは借家人である。「同姓不婚」の戒律は林姓に特に厳しいが他姓は他姓同居していて、若い者たちが同じ屋根に住んでも同姓で結婚が認められるから同一家内での風紀を紊すおそれが多いという。図19にBで示したのは寝台、Kは竈

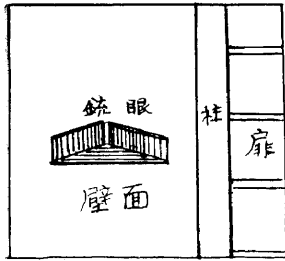


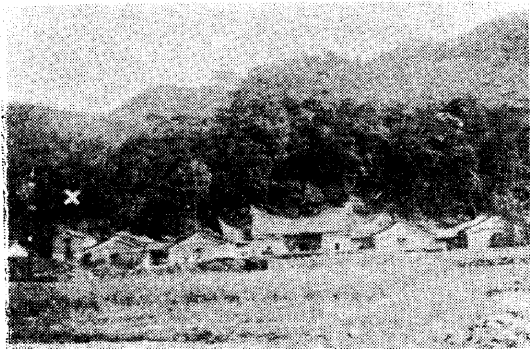
図20 正面扉側の銃眼

であるが、×で示したのは銃眼で、家屋の前面と後面の壁面の床から八〇糎ぐらいの高さの折敷の姿勢に都合のよい三角形に横に煉瓦壁に銃眼（チェーンガア）を、総計二十四個も設けてある（図20、図版IIb）。正庁の両側にある銃眼には靴墨や靴刷毛などを置いてどの銃眼も棚に使

っており、若者などに「銃眼有無」を聞いても「ムサファイヤ耶」（無知）と答えてチェーンガアの名さえ知らない。

図版IIcの左下には二階屋が倉庫のような別棟になっているが、下階の壁は石材で上階は土塼。その壁厚は二尺（六十糎余）で、銃眼は四ヶ所。上階の一箇の狙口は径約五糎の円形で、上階からは護竜の屋上に出る口があり、護竜の屋棟までは磚石を並べて、薄い屋根瓦を踏み破らないようにしてある。この二階屋は要するに土匪襲来の場合の婦女子や貴重品の避難場で、同時に見張所でもあった。また図19のように東北隅には三階建の望楼があったという。

なお陳財旺氏宅から西北約三百米にある下内埔三六九番地の陳聯瑞氏宅は一八九四年の建築であるが、やはり銃眼四十箇もあり、銃口を出す睨口のスリットは煉瓦の間の接着剤の漆喰で閉いであるが、これは風防けのためで、イザというときには銃口の先きで突けば穴が開いて匪賊を狙撃できるようになっていると老人が教えて呉れた。なお日領後の第三期の比較的新らしい家屋にも銃眼を設けていることについて、別に家主は注文した訳ではなく、民家の一般建築術の方式であろうと云われたので、この調査に協力された当時の台湾總督府の田中技師（台北市公会堂設計者）と共に、中国の建築家の虎巻を探したが、民家の大工は親方からの伝承だからそんな本はあるまいということであった。然るに現在の台大地質の林朝榮教授が若いとき中国の上海で商務印書館から大工の經典とも云うべき魯班經十巻を買って贈られたが、これには宮殿、寺廟、富豪の建築様式に庭園の各型式ばかり

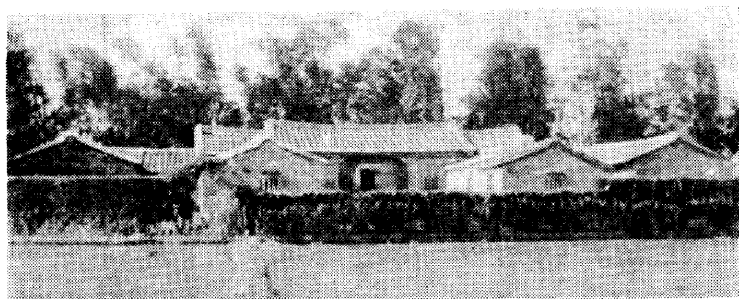


a 台北市下内埔 392, 陳財旺氏宅全景, 火庫起, 燕尾式棟, ×印は避難用二階建

b 陳氏宅の正身, 正庁前で, この家に住む婦女子を集めた. 窓下の矢印は銃眼の脱口



c 同じ陳氏宅の避難用 2 階建 (a の×印) の近景. 下階は石材上階は土塼



d 台北市富田町 192 の陳氏宅. 火庫起, 馬背棟, 昭和 6 年建築, 背面に薊竹藪, 前面は生垣, 手前は水田

38	本	害	叔	官	義	離	病	胃
生財	進利	口舌	災免	失火	進利	口舌	災免	進利
財	利	口舌	災免	失火	進利	口舌	災免	進利
54								

魯班尺 (神壇寢台食卓椅子など家具類用)

20	丁	害	旺	苦	義	官	死	劫	失	財	丁	門																							
12	登科	財旺	嗣星	災至	病臨	納福	口舌	進宅	喜事	元德	官嗣	失落	天年	益利	才德	大吉	順財	婚財	進益	失貴	退子	死別	離鄉	災田	養子	登科	還才	公事	爭執	執業	才德	室慶	進合	丁	門
	登科	財旺	嗣星	災至	病臨	納福	口舌	進宅	喜事	元德	官嗣	失落	天年	益利	才德	大吉	順財	婚財	進益	失貴	退子	死別	離鄉	災田	養子	登科	還才	公事	爭執	執業	才德	室慶	進合	丁	門

3.9cm

全長由尺 1尺2寸5分 4寸4分

で民家には触れていない。恐らく新版物であろうが、ただ李明仲氏の「营造法式」（上海商務印書館刊行）は若干民屋に触れており、藤田元春氏の「江南の民屋」（史林、昭四）は、南支民屋の参考になった。恰も後述の新莊調査の際、戸別調査で新莊の全利指物店で昔使用したという文公尺と魯班尺とを発見したので図21に写したので示した。尺の寸法は数字でなく、吉凶を示す熟語である。若い家族が椅子や食卓や祭壇、寝台が高過ぎるとかで体に合わせて椅子や寝台、食卓の脚を切ったりすると忽ち古老の逆鱗に触れ、凶の文句に当る高さでは必ず禍が家族の身に振りかかるという。高さや長さには吉、福、財、富、益などのある文句でなければならず、害、苦、失、死、病などの寸法は避けなければならないという。

一〇 宜蘭平野の開発と農業集落

台灣東北部の宜蘭平野は宜蘭濁水溪のデルタ地帯で、東方に三角形の広い平野を展開し、宜蘭県に属し、県政府は北の宜蘭市にあり羅東鎮はデルタ南部平野の中心都市をなす。このデルタ平野も一面の水田地帯で散居型の農家は、竹藪に囲まれて汽車の窓からは家屋がかくれて見えない程である。これは冬の強い北東季節風や初秋の台風に家屋を護るためである。この平野の開拓は前記のように呉沙や柯有成等の大租戸開墾によるというが、漢人の開拓の初期はデルタの低湿地を避

けて北部山麓地帯から始まり、原住民の高砂族の抵抗が激しかったので、初期は集居型をとり、周囲に城垣を設けたことは、地名に頭囲、二囲、湯囲、大竹囲、柴囲、王囲、石頭囲（石頭は人頭大の礫）、張公囲、茅埔囲などがあり、また平野にも土囲、壮囲のほか、一結、二結、三結、又は壮一、壮二などあり、防衛施設をもった集居型をとって、集団で防備を整えながら開拓を集め、山地の奥に原住民が退避したと共にデルタの水利を整えて散居型の水田地帯を形成したと思われる。但しこれら地名の全部が防衛のためと断定はできない。

## 一一 台北盆地付近の溪谷の集村

台北盆地の南から淡水河に合流する新店溪に西からの支流の安坑溪北岸に、東の下流から谷の北岸に沿うて大坪頂、頂城、下城、公館崙、大茅埔、頭城、二城、三城、四城、五城などの字名の小集村がある。台北市から十数軒で、地名に興味が惹かれて調べると、やはり高山族、特に屈尺蕃の襲撃に対する共同防衛のための集村で、農家の規模は台北盆地の散居農家より皆小型である。二城の部落の潤濟宮の中興碑銘には開拓の由来が次のように刻まれている。「茲我安坑内五張庄当未成庄以前林密谷暗、山面一帶兇蕃攀踞風土未純民屢受困咸謂不籍神力不能安居業業以保境而庇民乎……」とあり、安坑は「林密谷暗で、もとは暗坑と書いた。また三城の日興宮の楹聯の一方には「清祠吾邑驅凶蕃成懇業德感無窮」と書かれているのでも、領地を侵かされた原住民の反抗振りが察知される。漢族の開拓が進んでも蕃害は止

まず、蕃社の頭目と漢族の墾首と協議の上、公館崙と内挖子とに公館を設け、番丁二十余名を常宿警戒に当らせたが、頭城南方の部落民二十八名が賊首されたので、二叭子の地名を残して叩いている。改隸後明治三十四年八月十五日に公館崙南方の一服坡で男女十五名賊首されたのが、この地方の蕃害の終りで、日領後は討蕃の前線である隘勇線を東方山稜一帯に繞らせてから蕃害は終わったが、この北部台湾山麓に近い谷平野の小集村は原型のまま残存し、集村は竹籬や土垣で囲み、隘門や望楼のほか鼓楼（太鼓を打って急を告げる）などあり、三城の堡正（村長役）の廖氏の門塀には両側に銃眼があり、内から覗いて外を見ると前の道路に沿うて遠方までよく見透しがきくので実用向きであることが察せられる。

尚その南方の東勢鎮付近の大甲溪岸の段丘上でも、上新、下新、頭社、尾社、蕃社、上城、下城、大茅埔などにも共同防衛を主目的とした小集村があり、東勢鎮の土牛という地名は、防禦線の土牛溝という溝と土塁の存在を示す。

## 一二 台湾の南北両部の村落居住型相異の要因

既述のように台湾西部平野の村落では濁水溪を境として北部は散居型、南部は集居型をとるに至った原因を吟味して見よう。

(1) 自然環境と原始景觀から見ると、台湾は北と南とで平野部でも著しく異なる。冬季は北東季節風で北東部に連日霖雨を降らせ、台湾中南部は「雨の影」となって全く雨は降らない乾燥期で甘蔗の汁液に

糖分が登熟する。夏季は南西季節風が著しくないが、全島とも午後一、二時頃になると、上昇気流のための雨雲が山地の方から雷鳴と共に平野にも豪雨を降らす。午後五、六時には大雨一過で晴天となつて涼しくなる。所謂スコールであるが、南部はそれが北部よりも規則正しく、雨量も多い。南部の山麓地帯などに調査に行き、橋の下に雨を避けようとする所謂今日云われる鉄砲水で、急に激流が押寄せて来てあわてて橋の上に這い出す。そのため西部平野の南部の諸河川の下流は、東部でも同様だが、下流の氾濫原は広く幅一、二軒に及ぶ。乾季や雨季でも朝など河の流れはなく、河床の所々に水溜りがある程度なので、縦貫道路以外では、道路があつても長い橋は架ける費用がないから、河で道路が切れるが、冬季はその河原を歩いたり、自動車も所々水飛沫をあげて飛ばす。内地から着任したばかりで土地に馴れない警官が午頃晴天なので、河原を対岸に向つて歩いていたら、山からの鉄砲水の奔流に押流されて行方不明になつた事故もある。それで南部の冬は朝夜が明けると働きに出て午後二、三時には豪雨を避けて家で昼寝をし、雨が止むとまた働きに出るのが、農民の日常生活である。雨量と気温の南中北三部の比較を表1に示した。但し近年の理科年表には測点が台北と恒春しかないが、恒春は台湾南端の半島にあつて南西部の平野と様子がちがうから、一九六〇年のに拠つた。但し北部台湾のスコールは南部台湾のように時刻も定まらず、毎日とは起らない。

(2) 気候の相異は平野地帯の自然植物景観の上に影響して、著しい

表1 台湾西部平野の気候表

気 温	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
台北	15.2	14.9	17.0	20.6	24.1	26.6	28.2	27.9	26.3	23.1	19.9	16.9	21.7
台中	15.8	15.7	18.2	22.0	25.2	26.8	27.7	27.4	26.5	23.8	20.6	17.3	22.2
台南	17.1	17.1	19.8	23.4	26.3	27.4	27.8	27.5	27.1	24.9	21.7	18.5	23.2
降 水 量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
台北	90	137	186	169	217	302	233	303	230	114	61	73	2116
台中	33	64	116	132	225	376	300	333	134	21	18	29	1778
台南	19	34	52	69	172	378	417	439	152	31	16	18	1797

数字の下の一は最高月、……は最低月、統計年数1897~1944) 理科年表1960に拠る)  
但し近年は観測地は台北と台湾最南端の恒春だけで適当でない

乾季のない北部平野は、その原始景観はすべて鬱蒼たる密林地帯であり、これに反して南部平野は冬季半年の乾燥のため、その乾燥に堪える深根性の喬木が散在するだけで一般に草埔といわれる草原で、所謂サバンナ(散樹草原)景観であつた。近年でも台東鎮西北の卑南付近にこれが残つていたし、中国の広東省の海南島西部平野の山寄りの平野にはサバンナが広く分布し、植物学者の正宗巖敬教授が初めてそれに散樹草原という訳語を充てた。

(3) 植物景観と開墾型式は密接な関係があり、漢族の入植は南部平野から、蘭領時代の王田組織、鄭氏時代の営盤田や官田組織などは草埔を拓いて畑作を主とし一部は看天

田といって田を耕して置いて雨が降ると急いで田植をするという空模様を看視しての不安定の水田も台湾の水利灌漑施設の行われなかった時代にあった。入植農民は初めは政府の小作人で、一族、同郷、同姓の親密な関係の者が一団となって開墾事業を行い、その一団は前述のように事業の進捗と共に防衛施設をもった集村を形成した。集村の位置決定は地下水の得易いところが主であったろうが、勿論その割当地内に限られた。集村に防衛施設を整えたことは図4に示したように福建、広東の両省から入植し、両省人は言語、風俗、習慣が異っているため、屢々対立して闘争を繰返したし、住んでいる原住民の抵抗もあった。

(4) 居住型の相異は北部諸平野は原始景観は密林地帯で、南部の草埔と異って開墾作業は困難なため、富豪などの資本による大租戸開墾を行ったが、それが地割と共に散居型をとるようになった。それは南部と異なり、生活に欠かせない水が随所に得られたからでもある。しかし原住民や土匪の襲撃から守るために大租戸は所々に隘寮を建てて隘丁を常駐させた。ドイツの Gradmann も森林地帯には小型の散村、開放的な草原には集村ができるという一般的説明にもよく合う。

(5) 分類械闘というのは、類を分かち械を持して闘う意で、漢族同志の闘争である。その動機は種々あろうが、福建系と広東系とは風俗、習慣、言語がその出身地でも異って居り、また同じ福建系でも泉州系と漳州系との対立闘争がある。筆者が昭和十年福建省の厦門から漳州、広東省の汕頭から潮州方面を調査したとき、勿論入国査証の手

続きは一ヶ月もかかるので、厦門汕頭各領事の了承を得て潜入したのであったが、潮州方面で捕ったら広東大学の先生だと云えと、汕頭にある台湾人教育の東瀛<sup>トウエイ</sup>学校の中国人の小使に教えられたが、ここは同じ広東省ではないかという、汕頭土語といって広東市から来ている軍人などと言葉は通じないといったが、やはり危いから北京大学にせよと、日本人の先生から注意され、北京官話ならあまり下級の兵士には普及していないから大丈夫だろうということであった。しかし広東系の人は外貌は日本人によく似ているから、バスや韓江の渡船中で同席していて別に怪しまれなかったし、平服の日本軍人らしいのも居た。

台湾での福建系と広東系との相異は、前述の福建婦人の纏足、言語の相異と両系の日本語の訛の相異などで、よく注意しなければ日本人には両系の区別の分らないことは関西鎮での張君の通訳のこと、宿の娘の例でも分かるが、も一つの例は終戦後、台北大の研究の本島人の助手が、高雄の連市長の秘書に転任していたが、やがて市長交迭で辞めるからそれまでに一度是非来るようにというので、高雄市第一の市営の高雄旅舎に泊って番頭に市役所に筆者の来たことといつ訪ねるかを電話で連絡するよう依頼した。ところが日本語使用禁止のときなのに、日本語でモシモシと話して連絡がついたが、日本語を電話で使っているのではないかと「なに吾々は五十年間日本人として暮して来たのに今更台湾語は使えるか」という。後で聞くとその番頭は広東系で京都の呉服屋に勤めていたのが戦後引揚げて来たので福建語で

ある台湾語は電話で話せない訳である。女中は戦前からの日本娘でサービスは頗るよい。部屋も一番よい見晴らしのよい3号室をとって呉れたが、助手の金子寿衛男君が、先生1号の部屋はもっとよいのに空いているというが、やがて高雄市長の後任の黄氏（東京の東洋大学出身）が随員を率いてその1号2号の部屋に陣取った。福建系と広東系との言葉の相異は国語（当時日本語）によってのみ意志の疏通を得ていたが、或日田舎の小学校に入って教室に入ったら、黒板の上の中央の壁面に「国語常用」という日本時代からの標語がそのまま掲げられている。校長はこの国語は今は北京官話に変わったのであると云った。その台湾人の校長は浮かぬ顔をして「先生方は日本に帰れるからよいが、我々はどこにも帰る所はない」と将来についての不安を語っていた。高雄旅舎の日本娘の女中は沖繩出身で皆朗かに立働らいていた。

### 一三 河港町の原型としての新莊鎮

台湾の鎮には元の港町が多い。それは約二〇〇軒の台湾海峡を隔てて郷里の福建広東両省と小さい戎克船<sup>ジャンク</sup>でも盛んに往復していたからであるが、台湾の西海岸は遠浅で砂洲多く湾が少なく、河口港としては淡水河口の淡水、鹿港溪口の鹿港、牛稠溪口の東石などで、他は河口から遡航した河岸港が多かった。淡水河岸の板橋、新莊、艋舺、大稻埕、北港溪岸の北港（媽祖廟で著名）、八掌溪と急水溪との間の塩水港（今は河道移動で河岸が離れた）、前記の曾文溪の麻豆などで、戎克船から竹筏に積み換て各小支流でも輸送を行った。それで大戦末期

に米軍の上陸を防ぐため海岸に沿うて戦車壕を掘って平時は竹筏に帆をかけて輸送に便する海岸運河にするという案で、南部の枋寮海岸での試験を経て、軍から筆者の教え子の中沢工兵中尉が筆者の研究室で、秘密裡にその計画を行ったが、平野を西流する多くの河との連絡水路について苦心した。平時にも長く利用価値のある水路だから、土地の部落民を徴発して一斉に仕上げる筈だったが、やがて終戦で実現を見なかった。

西部の諸河流は夏の鉄砲水による砂礫で河幅が広く、道路に連絡する橋梁の構築に巨費を要し、縦貫鉄道は山麓に近い河の流路の分岐しない部分を通じ、縦貫道路はその西を並走しているが、分流が多くて橋も多く要する。濁水溪の西螺鎮に架せられたのは特に大きい。しかし西の海岸沿いの南北の交通路は極めて不備である。

河岸港は早くから対岸中国本土との貿易で栄えたが、その当時の港町の原型の残っているのは台北市から約二軒の淡水河北岸の新莊鎮である。ここは乾隆年間には、一府、二鹿、三新莊といわれ、台南、鹿港に次ぐ河港として栄えたが、光緒九年（一八八三年）の大火で市街は烏有に帰し、また河岸も浅くなって戎克船旋泊は下流の艋舺（万華）から大稻埕と下流に港の機能が移って、その後は街は河に背を向けて、河岸に沿うて通ずる道もなくなった。しかし光緒の大火後の再建で河港の市街としては、その原型が割合乱れずに残った。<sup>（二五、六）</sup>ただ街路幅の二間を三間に広くした位であり、主要交通路は町の北を東西にバイパスとして並行して、店舗率（Shop ratio）も中心部に高い。

この街の沿革については元本街長を勤めた黄淵源氏が故事に明るく、種々の教示を得た。氏は若い頃巡撫劉銘伝が光緒十二年計画、同十九年（一八八三年）完成の基隆新竹間の輕便鉄道（允三軒）が日領後明治三十二年から三十五年まで改修のとき、路盤工事の工夫頭として、時の台湾総督の乃木將軍に親しく会って話合つたことを自慢として居られたが、新莊がまだ河港としての機能をもっていた頃は、貿易商は多額の売上金の入手が、土匪（集団強盗）の狙うところとなり、市街は城壁はないが、中央街路に臨む店舗は連檐式で、建物の壁は公壁といつて隣同志の共同壁で、建物自体が城壁の役をなした（図22及び図版III b c）。南側の河岸に通ずる横道は少なく、幅も人間一人辛うじて通れる程度で、いざとなると閉鎖することも容易である。街路の北側の裏側には幅三間の後村圳という灌漑溝が街と平行しているの、これも濠の役をなし、街路の中央部の媽祖廟の裏手の圳（水路）に橋を架し、橋の裾に旧隘門があり、隘門の両側の壁には銃眼があり、守備員の屯所の跡もある。中央街路の北側に横道が数条あるが、後村圳に橋がないので後村圳を渡れないから防禦上差支えはない。街路の両端にはもと隘門があつて、南部台湾の集村と同様壮丁が交替で警備に当り、午後九時頃には門扉を閉じ、それ以後は予め定められた合言葉で狗門という潜門から入る。また夜間は壮丁四人一組となつて竹筒を叩き乍ら隘路を巡邏した。このような厳重な警戒は日領後の警察力で行われなくなったが、もとは或る家に巨額の売上代金が入つたということ、土匪の連中が日中街に潜入して聴き込むと、その家に目立た

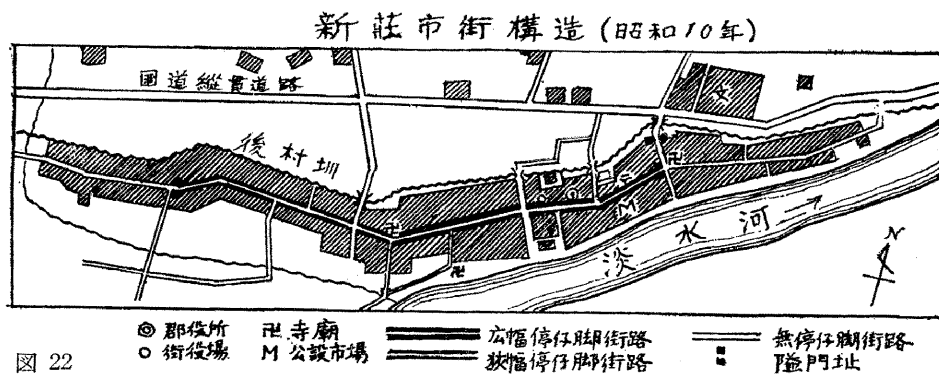
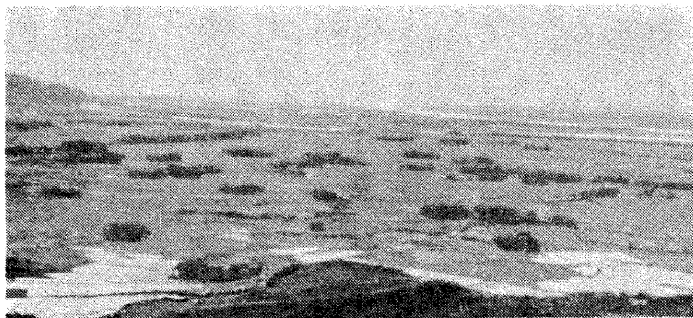


図 22

ぬ様に石灰粉などで印をつけ、夜になつて隘門の外にある廟に詣で、竹の根を二つ割りにしたような筈（ボエ）を神前で投げて、一本が表、他が裏と出ると吉で、集団で隘門を破つて予め偵察して目印をつけた家を襲うという。それで街路に面した二階の街路に面して平時は閉めてある小窓の下廊下には、投石用の石塊や、目つぶし用の石灰粉、一寸五分位の長さの互に直角に鋳合させてどれかが一本は必ず直立する三叉釘、また街路上で足を滑らせて転倒せしめる竹の細片などを木箱に収めてあるのを見て、当時想像もしなかった日本の大学紛争を想い出すが、黄氏が土匪の襲撃のことにあまり詳しいので、思わずあなたもやったことがあるかと聞いたら、あわてて手を振つて鉄道改修の工夫頭をしていたとき人夫達の話聞いたのだというが、現実これら防禦品を見せら



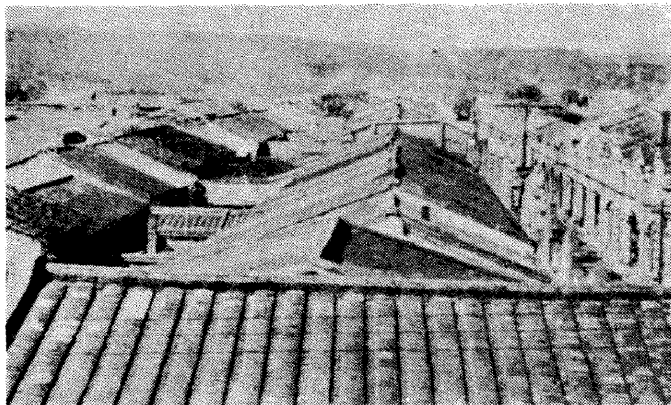
a 台北盆地東南部の水田地帯の散居型（昭10）

b 麻豆の頂街と市区改正施行前の建物（左方）と施行に伴い改築せる店屋（右後方）とを示す。（左の古き家は停仔脚が取払われた）



c 新莊の西の末梢第4区を西に望む。家屋は普通住宅及び手工業者の家で、停仔脚もなく、扶壁もない平屋ばかりの通りである（昭11）

d 大溪下街北側多落街にて五、六落に及ぶ。



れては当時の黄氏ばかりでなく一般古老の常識でもあったろう。

#### 一四 鎮の市街景観の原型の特徴

郷村の家屋は既述の如く凹型を基本とするが、鎮の市街地では、街路に面して間口を広くとれないので、家屋の規模を大型にするには奥行を深くするか、二階、三階の高層にするかとなる。前項の新庄の場合には淡水河と後村圳とで奥行は限られているが、他の多くの鎮の市街では敷地の奥行は十分にとれるので、建物の後に中庭を隔てて数棟の平行して居宅をつくる。棟を落というから、前落、中落、後落など三棟が前後に並ぶ（図23）。このような三落起（起は建）から五、六落起に及び、裏通りまで続いてそれに裏口をもつものもある。中庭の両側には壁から片流れの屋根に廊下があり、後落に通ずる。中庭には小庭園を造り池もある。このような多落起が隣同志何軒も続いて所謂多落街をなすことがある。その代表的ものは

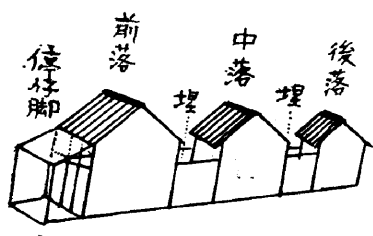


図23 三落起の町屋

台北市から西南西約三軒の淡水河南岸の大溪鎮がそれである。ここは光緒の頃は日に二百数十隻の河舟が下流の新莊、艋舺、大稻埕の諸河港と往復して、富豪の貿易商が多かったが、その後舟運の衰微と共に街の商況が振わず農業地帯の中心都市となった。この街は淡水河岸の二段の段丘上にあり、下の段丘にあるのを下街、上のを上街というが、下街の商

店街には五、六落街もあるが、上街は二、三落街に止まる。（図版Ⅲd 参照）

#### 一五 停仔脚

台湾の市街の商店街には街路に面して各戸の軒先きや階下にアーケードがあるが、徒歩者にとって強い日射を避け、俄か雨の雨宿りともなる。また店舗にとつては強い日射を避け、少し薄暗いこともあるが、陳列商品の傷みも少なく、案外風通しはよい。日本の各地の商店街にも夏のアーケードや雪国では雁木は見られるが、これは街路を屋根型に被うが、停仔脚の敷地は道路に接する各地主が提供しているので、買物客通行の多い街路の停仔脚の幅は広く、客の出入の少ない手工業店の街は幅が狭く、時に一人が漸く通れるのもあり、住宅ばかりの街路では停仔脚をつけない所も多い（図版Ⅲc）。但し街路の幅は大体一定の幅で通行には差支えない。平屋の停仔脚は図23のように屋根の庇を長く出して柱で支えているが、二階屋の場合はその下の一階が停仔脚に充られ、その上の二階の前面に扶壁といつて種々の装飾がつき、またその店の看板にも利用されている。

停仔脚の原型とも云うべき古いものは、濁水溪の南の今の雲林県中央部土庫鎮のものであろう。これは日領時代土匪峰起で兵火に全焼してから再建したもので、ここでは図版Ⅳaの如く木柱で支えた屋根が別棟になっているもので、また鹿港にもあったが取払われた。日領になつてから市区改正が当時の行政上の街に及び、大火で復興した旧式

版図 IV



a 土庫の明治型市街の停仔脚

b パイワン族武大社（右上の横縞は切替畑の土留め）



c パイワン族の武大社の一部

d 武大社の北の隘寮  
北溪対岸の切替畑



の土庫式の停仔脚は明治型といえるが、その後は大正型で多く煉瓦造りで、次が昭和型といってコンクリート造りの家屋の一部として大正型と色合いも異って来る。

## 一六 鎮郷の居住型と迷信的信仰

九項の図20に示したように家屋に文公尺、家具類に魯班尺を用いて、寸法を吉凶によって測ってきめたり、窓の棧の数が必要奇数であったり、その他に建築造作上に迷信が多かったが、まだ防禦防風のための薪竹簾などや、家の前庭に池を掘って飲料から洗濯（衣類や収獲物の洗濯）家鴨、養魚に至るまで、その実用性の明かなものに対しても迷信的に受けとる。池はそこに水の溜るように家に金が溜まると信じ、竹簾も家の守護神とする。戦時中食糧増産のため、治安の維持のよくなった今日、相当の広い面積を占める竹簾を伐り払って甘藷や果樹を生産することを官から慫慂して、大部分これに従ったが、偶々その係官が別の事情で左遷されたとき、家の守護神を伐り払った祟りだとする老婆の言は前述したが、戦後は刈り取った竹簾も少しずつ竹の株の根を残して居いたから忽ち旧態に復した。また部屋の窓が小さくて室内が暑苦しくても、窓を大きくして風と共に日光が多く入ると、家から金が逆に出て行くということは、日本の奈良の人も云っていたが、日光で畳や器物などが陽やけて早く傷むからでもあろう。これらは古い集落の原型の残されたものから窺い知ることでもできる。

## 一七 高山族の居住型

原住民は高山族は高砂族といったもので、漢族の入植と共に平埔蕃の一部は漢族に同化して漢籍を得たものもあるが、図24に示したように台湾の山地帯に約二十万の人口が八族に分かれて部族毎に定った分布区域内に、何れも蕃社と称する小集村を形成している。北部のタイヤル族の家屋は何れも竹の柱に茅の屋根の簡素なもので、一般に高床家屋で、特に物置の納屋には床と下の柱との継目に盃形に板を削った凹面を下に向けて挟んで地面から柱を登る鼠の屋内侵入を防ぐのが目立つ。中部のブヌン族も竹の柱に茅の屋根が多いが、家の床は地面より五〇厘低くし、尾根の庇が地面に近いのは防風の目的であらう。さらに西部のバイワン族は付近の地質が粘板岩なので、その板状節理に



図24 台湾原住民高山族の種族とその分布区域 鹿野忠雄氏原図（陳正祥：台湾地誌，下冊，図381による）

沿うて板材として屋根と壁に利用するスレート造りで、暴風にもよく堪える。しかもブマンの家と同様家の内の床は低く掘り屋根も低く、床の中央に大きな炉があつて間仕切はなく、角の入口に沿うて炊事場のほか三側の壁に沿うて蚊帳を吊った粗末な寝台が幾つもあり、窓はないので室内は昼でも薄暗い。

タイヤル族の部落には理蕃課の指導で、改良蕃社と称するものもあるが、唯道の両側に十数戸の家を互に向い合つて整然と並んで、各家の屋敷に垣根もない。各部族の部落は数百米から千米の高さの山地の緩斜面に不規則に小集村が散在している。

高山族は元來狩猟民族で、弓矢やワナで猪、キョン（タイワンカモシカ）、鹿、黒豹などを狩るが、これは男子の役で、婦女子は住居付近の緩斜面を耕して粟や甘藷を栽培しながら育児をして家を守るが、これら狩猟の対象となる野獣は常に移動し、自ら山に道ができる程で、筆者も屢々猪道と知らずに道を歩いたが、樹林の枝が邪魔になり、腰を曲げて歩いた。併しその道は危険で大きな弓を道の傍に水平に仕掛けて麻糸が道を横切り、猪などをとる仕掛け弓であるときとつて、手に携えたハンマーで糸を叩いたら大きな矢が横から水平に走つた。人間の膝あたりに当り大怪我をする。また峻しい山の稜線にも細い道があるので歩いたが、細長い立木を下に曲げてその先きにワイヤーの輪をつけ、鹿類がそのワイヤーの輪に首や足を突き込むと、下に曲げた立木がピンと立つてワイヤーで体が逆さに吊り下げられる。筆者も輪に足を突き込んだが、古い畏だったので立木が曲つたまま真直

に立たなかつたので足首が腰まで吊し上げられただけで怪我はなかつた。台湾人は旧正月休みに鼠取りのような餌をつけた弾仕掛の挟み鼠で猿をとつて肉を煮て食べ、脳を黒く蒸焼きにし、肝は蔭干しにして売る。昼食にその小屋に寄つて猿の肉を一口喰べたが、別に変つた味はなかつた。母猿が異にかかると子猿が傍にうろついているので、生けどりにして当時一匹三円で売っていた。これは蕃界に近い行政区域の台湾人であつたが、蕃界の山奥では川床は礫の堆積で下流よりも浅いので、橋上から河原の礫の上を猪の六頭が跳ねながら橋下を走り去るのを橋上から間近かに見たし、また関山越では上流の河原で黒豹も随行の蕃人タハイ君と共に見たので、近くの駐在所に寄つて話したら、タハイは狼の名人だから間違いない。巡邏の際これから十分注意せねばと怖れていた。

そのほか蛇類は豊富で毒蛇では青ハブ、百步蛇、ガラガラ蛇、亀殼蛇、雨笠蛇などのほか、太い丸太棒のような錦蛇は多く、これは平地にも多いが、毒蛇はそれぞれ毒の質がちがうので、噛まれた蛇の種類を確認しないと血精注射が各毒蛇の混合液になるので、効果が薄い。或る駐在所で毒蛇に噛まれた老蕃は、その蛇を殺して持参したので、巡査が電話で現地開業医の巡査と連絡しながら血精注射液を探していた、老蕃は腦貧血のためかしきりに欠伸をしていた。しかし毒蛇は強精剤になるとして焼いて串に挿してよく駐在所の宿舍の壁に並べて立ててあつたし、また皮は細工物にし、肉は煮て干して粉にしてやはり強精剤になると、台北市の小平標本店の主人と親交があつたので貰

ってよく飲んだが確かに食欲も出て効果はある。南部の潮州鎮には大規模の蛇取り商店を参観した。毒蛇は人が近づいても逃げないので首筋を木挟みで押えて容易に捕獲できるので蛇も少なくなりつつある。しかし子供は毒に抵抗力が少ないので死亡率多く、子供等は常に蛇族研究所に連れて毒蛇の種類をよく覚えさせる必要がある。

かくて狩猟の対象となる野生動物が少なくなつて狩猟時代から農耕時代に移ったが、粟と甘藷だけでは栄養不十分だから、駐在所には猟銃を五、六挺備えつけて、担当蕃社の蕃人に貸して猪やキョンを狩つて栄養の補給にするが、獲物の肉は蕃社では各家に平等に分配する。それで猟区の境界争いもあり、獲物を逐つて蕃界から行政区まで出て来ることもある。

蕃地の農地は傾斜地が多いが、耕土は雨で流れて生産力が早く衰えるので、階段耕地ではないが傾斜畑に水平に木材や石塊で垣をつくっている。それでも無施肥で、地力の衰えが早く三、四年で未墾地を伐採して切替畑が多い。併し山地の農業生産性は低いので、高い蕃社を山麓に移転することを奨励していたが、老蕃は山麓にはマラリアが多く、貧しくても元の蕃社の方がよいと頑固に反対する。しかし若者はやはり文明生活にあこがれて蕃社移住を主張し、駐在所でよく親子が争っているのを見る。そこで旧蕃社は老蕃の思出のために移住後もそのまま家は残して夏の間暮すことにすると仲裁していたが、平地に近い所は楽しみも多く生活も楽で、老蕃もやはり次第に落ちついて来る。元の山奥の蕃社の建物は取払つても甘藷などがそのあとに繁茂

し、蔓を引張つて芋をリュックに岩石と共に無断で載いて、野外で焼いたり宿でふかして貰つておやつに舌鼓を鳴らしたものだ。しかし山麓の清流にはマラリア伝播のアノフェレス蚊が多く、ある蕃童教育所の前を通つたとき丁度昼休みで、児童は胸腹を出したまま校庭傍の道傍の斜面に十数名寝転んでいるが、みな腹が大きいので弁当に大飯食つたためかと思つたら、みな慢性マラリアで脾臓肥大と発熱のためだという。すでに特效薬として塩酸キニーネ、硫酸キニーネ、独逸製のアテプリン、プラスモヒンなどで、急性の場合は速効を呈するし、予防薬としてもよい。しかし専門医は予防薬として飲むな、それはマラリアには三日熱、四日熱に毎日熱(熱帯マラリア)の三種あり、それぞれ薬や手当がちがうから旅行日程の短いときに予防薬を飲むと発熱の型がくづれてマラリア病の種類判定に手間取るともいわれた。自分には山麓地帯の地形地質調査でキャンプ生活して屢々アノフェレス蚊にも刺されたが、十六年間の台湾生活で一度もマラリアにからなかったので、戦後引揚げて郷里の札幌に帰つたら上の兄に「お前は子供のときオコリ(マラリアの和名)ふるつたことがあった」ときいて成程免疫性を持ったからだと思つた。高山蕃の低地移住もよいが、風土病から児童を守る対策の不十分なのは管理者に責任があるが、調査で河床にキャンプしていたら風が降つて来たので、高い鉄線橋の吊橋の上から、予めキャンプの了承を求めた駐在所の巡查が、増水で危いから駐在所に泊れと叫ぶ。有難いと崖を登つて駐在所に行くと巡查家族一同マラリアで発熱中なので気の毒であつたが、家族一同と一張の蚊帳

の中にもぐって眠ったこともあった。

台北市の西南の角板山の蕃社は早くから蕃社見物の名所であるが、ここが蕃童教育所設置の始まりで、蕃地討伐の終った明治四十年頃、当時の駐在巡查の金高鶴吉氏は退官後居残って薫風館という旅館を経営されたが、昭和十四年筆者が泊ったとき教育所開設当初の氏の苦心談を聞いた。金高氏は度々角板山社に行き、頭目連を集めて児童教育の必要性を説いたらやっと彼等も納得した。それで角板山駐在所に付属の蕃童教育所を建て、ここに寄宿させることにした。教育を徹底させるには蕃社に帰宅させてもとの慣習に戻っては折角の苦心も水の泡だからである。その了承も得て学齢蕃童数十名を教育所に連行する途中、蕃童の一人が心細くなったか逃げ戻ろうとするのでお手のものの捕縄をかけて連行して一行は教育所につき、先ず彼等は風呂に入ったことがなく垢だらけなので、金高夫人が早速風呂に入れたが、沐浴石鹸は勿体ないので、洗濯石鹸で垢をこすり落し、予め用意した浴衣を着せて居室に落ちつかせた。ところが一人の蕃人が頻りに閉鎖された駐在所の門前でわめくので、何用かと夫人が出て訳を聞くと、金高巡查の首を切りに来たという。その訳は自分の子を縄で引いて行ったことは獣扱いで誠に憤慨に堪えぬからだという。夫人は種々慰めたが暫らく門前に頑張つて夕方帰って行つた。当時の駐在所の敷地の周囲には杭柱に裸かの電線を張りめぐらしているから、塀を越えて闖入は感電できない。昭和十年頃でもまだ電線を張り廻らした駐在所を見たことがあるが、電流は止めていた。今は日本では牛の牧場に弱電線を

張つてある。

次に問題は蕃童を預つた以上は学籍簿をつくらなければならない。一人づつ親を呼んで聞くと来るのは男親は働きに行っているからみな女親ばかり。中にはあの子はどの父親だったかなあ「忘れて了つたことあるよ」というものも相当で、これは高砂族は母系家族で、男は狩猟に出かけたり、誠首や他部族との闘争に出かけて帰らず蒸発して了うこと多く、家屋と子供と周囲の畑を管理する妻が戸主で、父が帰らないとなれば適当な男を家庭に入れて替りの夫とする。それで子供によつて父の違うのがよくある。また反対に今の夫はどうも気に入らないと思えば、畑仕事に出ている間に、その夫の持つて来たもの一切を負籠などに入れて家の扉の外に出して置く。夕方農作業を終って鼻歌でもうたい乍ら帰宅するとこの状態を見て、嫌われているなど勘づいてその荷籠を背に何処ともなく立ち去るという話を台北大民俗学の移川子之藏教授から聞いたことがある。

高砂族の男はこのように温順かというと、なかなか闘争心が強く、負けず嫌いであることは日領時代の討伐でもよく表わしている。昭和八年頃南湖大山(三三〇m)に、田中薫、鹿野忠雄両氏が発見した氷蝕地形を見るため、台北大山岳部員と同行し、登山口のピヤン社の蕃丁六名を道案内と荷物担ぎに同行して、二泊目に南湖主峯の滑かなローシムートンネ(羊群岩)上の短かい新高チガヤの密生した厚い絨氈のような平坦面でキャンプしたが、夕食後退屈したので一行中で若い十八歳のタイモアカシ君に一丁相撲をとろうかと云つたら、戯談半分

なのに力一杯でかかって来る。そこで講道館二級の腕前の柔道の手で投げたところ、一行にはピヤン社の青年団長で一米八、九〇糎の大男のワタンタツクンがよし仇打ちと筆者にいどんで来たが、高山上で気圧低く息切れがしたので断ったところ、学生の大崎君が丈は低いが小肥りの体で代って取組んだら、意外にもワタンが負けたので三本勝負といって力づくで大崎君をねじ伏せたが、三本目には大崎君はワタンを宙に飛ばして勝った。聞けば大崎君は台北大農専の相撲部の大将で対抗試合で合宿練習したばかりという。しかし両者の着ていたシャツはボロボロ。大崎君の妹も登山家で他に研究室のタイピストと二人の女性がやっと着れるように繕ったが、この合戦中の大喊声に少し離れたキャンプで蕃語試験準備中の附添巡査がおっとり刀で跳んで来て、どうか勝負事はするな後がうるさいという。翌日主峯の頂上を極めて下山中、二ヶ所川を徒渉するのであるが、蕃丁の一人は背を向けて乗れと相図するので脚を濡さずに麓の街道にいたばかりでなく、弓などに用うる丈夫な木のサビタのステッキを呉れた。自分は先生だからと思うと大崎君も足は濡れずやはりステッキを持っている。同行の二人の女性と他の学生は濡れたままで特別扱いはしなかった。弱者を軽んじ強者に服従の風が強い。その後も蕃地でワタンタツクンが工事の傭人夫として行くのに偶然会ったとき「オサキサンチョイネ」と云って別れたが、台北大の植物の正宗教授が後にピヤン社に行かれたときタイモアカンが青年団長になったが、富田先生に相撲の仇を打つから来るようにと云っていたそうで、なかなか負け嫌いの一徹な性

格があることは他にも多くの例話がある。

台湾中部以南の南蕃の蕃社所在地は、その平野部の冬季半年が乾季であるというが、山地は乾季でも、雲霧がかかり湿気はあるので農耕には水不足は少ない。ことに島の脊梁をなす台湾山系の峙などでは、特に雲霧が東西両方面から集まって通過し、知本越の最高の峙の駐在所の巡查などは、「我々は魚である」という。毎日濃い雲霧に閉ざれて、洗濯物は乾かず、自家用の庭の野菜物も育たない二千米の高地である。南部台湾の山地では四―五百米に常に霧のかかる所謂霧帯(Nebelzone)があつて、榕樹などはその枝から垂れる気根が霧の水分で下に伸びて地面に達して太い幹となり、一本の木が何本もの幹が横枝から出て、どれが親幹か分らないのがあり、道路の路面は苔が厚い絨氈を敷き詰めたようで、足の裏にできた魚の目は苦にならず極めて快適であるが、道傍の草の葉先に蛭が群がって通行者の足につき腿や脛について血を吸う。この四―五百米の霧帯付近では、地形的に緩斜面が多く、野生の護謨の木もあるが、日本の星製薬会社社長の星一氏は大正末期に西斜面のライ社と東斜面の知本社とに規那の苗を植えたが、大戦中に南方作戦開始の際、マリリア予防や治療のキニーネの需要に迫られた際、十五、六年前に植えて放置した台湾の規那樹のことを思い出して行って見ると幹が直径二、三〇糎にも成長して、盛んに伐採して製薬に充てた。

このように南部の蕃社は霧帯の下の一、三百米の山地の緩斜面に点々と散在し、この緩斜面一帯は図版IVのb、c、dのような切替畑が

分布し、傾斜地で雨で表土の流亡を防ぐため水平に多くの土留めがある。切替畑は無施肥のため、五、六年で収穫が減るので、他に畑を拓いて放置し、地力の恢復を待つてまた耕やす粗放的農法である。この写真は屏東平野東方山地の霧頭山（三七三米）面斜面の高さ二、三百米のブダイ社（武大社）で、パイワン族に属するが、この駐在所に滞在調査中、養蚕指導をしたら蠅が発生し、食卓上の食物が蠅に被われて、食品の何たるかは、食器の形か箸でつついて判断するほどで、蕃女のツルブが団扇で蠅を払わせられるが、汁物以外は逃げず蠅も一緒に相当喰べたろう。何せ流行病もないからそう心配せずに済ませた。

そこでこういう閉鎖的小地域社会の住民の考え方の特色を知った。

それは武大社の頭目が或日駐在所に来て調査に、シナ事変も長引いて日本軍も相当手古摺っているようだが、わが武大社はこれまで他の蕃社と戦って一度も敗けたことのない強い蕃社だから一つ日本軍に応援しようと申出た。相手の調査は事変出征後の帰休兵だから、こんな百戸余りの蕃社の応援の無意味なことを理解させる言葉もなく礼を述べただけに止めたが、ある日警察電話で日本軍が台湾南部に上陸すると通報で、これは好機だと武大社の頭目以下数名を連れて、西方の屏東平野一帯を眼下に見おろす潮州斷層崖の上に出たら、遙か枋寮の沖合に一万屯級の輸送船六十隻が仮泊し、平野一帯は約五万の兵が散開して演習中で、そのために平野一帯の色が軍服のカーキ色に変っていた。一口に六十隻の船といっても実際に山から見下すときとまことに壯観極りなく、頭目たちも胆をつぶすほど驚いて、これは日本軍の全部

かと聞くので、いや極く一部隊にすぎないと云うてからはもう頭目は自慢話は一切しなくなったという。

後日台湾東岸の中部大嵙崁溪が台東山脈を横断した河口の大港口に行ったとき、たまたまその駐在所の調査が帰休兵で、枋寮上陸軍に属していたといって、あの軍隊は楊子江下流の白茆口から広東湾内のバイアス湾敵前上陸の予定であったが、スパイ通報か天気予報かで急に広東湾から台湾南部に向きをかえたのであった。これは部隊長と輸送船長だけに知らせ兵員は誰も知らないから、枋寮沖に近づくと、いよいよ敵前上陸と皆を決して緊張していたが、陸からは何の反撃もなく、船はどんどん陸に近づき、海岸に人だかりが見え、中には日本服の婦人が日章旗を振ってさえ居る。やがて小舟でバナナ売りが軍用船に寄って来たので、ここはどこかと聞いたら台湾の枋寮だというので、さては敵地でなく味方で、しかも自分の勤務地だと知って、船内の兵隊達にその旨伝えて廻って急に緊張が解けたが、他の船ではそれを知らず、上陸しても乱暴したのもあるという。

高砂族は漢族入植と共に逐次山地に退避し、恵まれない生活環境と低い生産性の土地で乏しい生活を続け、しかも八部族に分布区域が分かれて小さい蕃社集落に閉鎖的な社会生活が続けて来たから、世情にうといところがあるが、決して野蛮人ではなく天性知力や技術能力の劣った民族ではなく、学校教育や社会教育をもっと充実させれば立派な文明人として国家に貢献できると思う。唯旧来の陋習と入蕃許可証で出入が制限された狭い封鎖地域社会だけに生活して伝承したため

て、かつての日本の理蕃政策にも反省すべき点が、特に教育や経済開發の方面にあったと、かつての同胞に対し反省させられるものがある。

現在三、四十歳の日領の教育を受けた人達には國語が北京官話になつても日本語は忘れず、台湾の漢族との通用語となっている。四年前秋田南高校の齋藤実則氏が台湾視察の際、日月潭見学の途上、台中市南方の草屯鎮の高砂族研究家の陳偉光氏宅を訪ねて、高砂族の現状聴取の際、陳氏の母君が、齋藤先生に向つて「あなたは日本人か、それなら教育勅語を暗誦できるだらう」というので「朕思うから御名御璽」まで奉誦したら、やはり日本人だということで歓待され夕食の接待まで受けたと聞いた。<sup>(二七)</sup>

どこの家にも家訓とか家柄があるように、国にも國訓とか國柄がある。あまりお互に他家の家柄や家風に干渉しないように、徒らに他國の國柄國風を真似しないで、わが國の教育の大本たる教育勅語によつて國民の生活の基準としなければ、それは日本に住んでいても、眞の日本人でない偽國民ということを陳氏の母堂が諷したとも思われる。アメリカ占領政策はとうに終つたので、眞の日本教育に戻るべきが安保反對運動などよりも刻下の急務である。本學の學生諸君は入学式のエ教育勅語奉誦によつて將來の正しい日本人の態度を益々堅持するよう勵むべきであらう。

註(一) 筆者：台灣鄉鎮地理學的研究(一九四〇)、台北市台灣風物雜誌社。

- (一) Ratzel, Friedrich: Anthropologeographie, II, 1891, s.s. 269—283.
- (二) Lautenschach, Hermann: Atlas zur Erdkunde, 1957, s.s. 62—63.
- (三) 矢島仁吉：集落地理學(一九三六)古今書院
- (四) 渡辺久雄：条里制の研究(昭和三三年)創元社
- (五) Hall, Robert, Burnet: Some rural settlement forms in Japan, Geogr. Rev. Vol. 21 (1931).
- (六) 筆者：我が植民地における聚落の原型に就いて、地理教育、一九卷、一一二號(昭三)
- (七) 筆者：南部台灣の一部に於ける集居型農村聚落とその經營景。地理學評論九卷、七號、(昭六)
- (八) 筆者：台灣に於ける合成聚落としての麻豆及び佳里、地理學評論一卷、七號、昭一〇
- (九) 筆者：Characteristic Features of Formosan Settlements in Taiwan, Japan. Comptes Rendus du Congres International de Geographie, Amsterdam. (1938).
- (一〇) 筆者：台灣と南支那との村落居住景觀の比較。台灣時報(昭二)
- (一一) 筆者：北部台灣に於ける村落居住型形成の要因に就いて。「地理學」四卷、四、五、六號(昭二)
- (一二) 筆者：八卦丘陵南部の經濟地理、「地理教育」一七卷、一一二號(昭二)
- (一三) Gradmann, R.: Süddeutschland, I, 1931, s. 122.
- (一四) 筆者：台北州新莊街新莊の聚落地理的特徵。台灣地學記事八卷、五、六號(昭三)
- (一五) 筆者：台灣聚落の研究、台灣文化論叢(昭二)
- (一六) 齋藤実則：三週間台灣一周旅行、その一、地理歴史月報、一一二
- (一七)

号(昭三)

「註記以外の台湾集落関係の文献」

- 1 台湾に於ける農村聚落の形態に就いて。台湾地学記事、IV卷2号、昭八
- 2 台湾の農村聚落、日本学術協会報告、一〇卷一号、昭、一〇
- 3 台湾本島人の姓氏の分布と居住型。台湾地学記事、VI、四、五号、昭一〇
- 4 台湾と南支那との村落居住景観の比較。台湾時報、昭一一
- 5 台湾に於ける地方都市の地理学的研究。予報(第一報、地方都市の意義と形態)台湾地学記事、XI、。号(昭三)
- 6 南支那の聚落、「太平洋圈」民族と文化、上巻、昭一六
- 7 台湾街の研究、「東亜学」第六輯、昭一七、日光書院。
- 8 On the Rural Settlement Forms in Taiwan (Formosa), Japan. Fifth Pacific Science Congress A2—33. pp. 1391—95.
- 9 陳正祥：台湾地誌、上、中、下冊、敷明産業地理研究所研究報告、第九十四号、一九五九
- 10 Chiao-min Hsieh. Taiwan-ila Formosa. a geography in perspective, The Catholic Univ. of America, Washington. Butterworths, 1964.

(本学教授・理博・地理学)